

# 15人の語り で学ぶ HIV陽性者と 地域生活

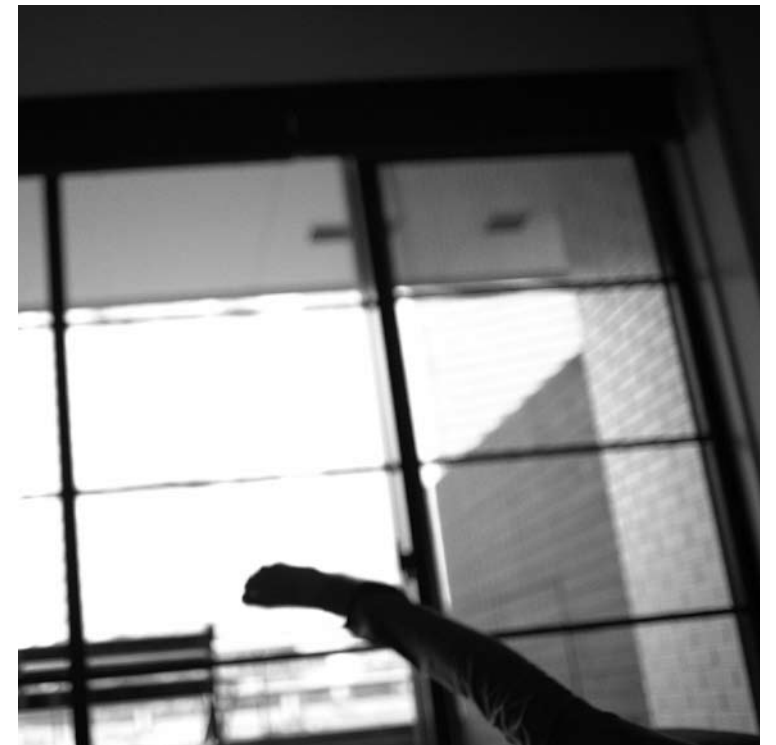
事例から支援を考える

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業  
地域におけるHIV陽性者等支援のための研究班 編



# 15人の語り で学ぶ HIV陽性者と 地域生活

事例から支援を考える



## contents

この冊子を手にしたかたへ …2

就労とHIV HIV陽性者の相談を聞く立場から …3

この冊子の使い方 研修等での活用を含めて …4

15人の語りから …7

HIV/エイズの基礎知識Q&A …44

## この冊子を手にしたかたへ

本冊子『15人の語りで学ぶ HIV陽性者と地域生活～事例から支援を考える』は、HIV感染後、さまざまな生活を送る15人の語り手の声を紹介するものです。

20代から40代、女性や男性、異性愛者や同性愛者……、多様な背景を持つ人たちが、HIVと共に生活を送っています。HIV感染について、「まさか自分が」と思いもよらなかった人や不安を感じながら検査を受けた人、自分で検査を受けようと思った人から、必要に迫られて検査を受けざるをえなかった人——人それぞれの状況から始まった今の生活。そして、HIV感染という事実をすぐに周囲に打ち明け、周りからのサポートを受けながらスタートを切った人や、周囲には言わない選択をした人。そこには本人の意思だけでなく、さまざまな背景や状況が垣間見られます。

そして今、15人はどのような生活を送っているのでしょうか。仕事について、どんなふうを考えているのでしょうか。精神的な問題や課題について、どうやって取り組んでいるのでしょうか。

インタビューでは、おもに就労と精神健康(薬物使用)に焦点をあててお話を伺っています。

就労と薬物——このテーマは、この冊子に収められたインタビューを実施する前年度に、当研究班がHIV専門医療機関の外来看護師やソーシャルワーカーなど、医療の場でHIV陽性者を支援する人たちを対象とするインタビューのなかで、「支援が難しいもの」としてあげられたものです。したがって、この冊子に登場する事例がHIV陽性者全体の傾向を表すわけではありません。

HIV専門医療機関における医療的なケアや支援は充実してきています。こうした医療機関はHIV陽性者にとって、たんなる受診の場としてのみならず、生活上のさまざまな心配や悩みなども打ち明ける先となっているようです。

長期にわたるHIVの療養生活においては、医療だけではなく、日常生活や社会生活をどう維持するのかが、非常に重要なテーマになってきています。HIV陽性者への就労支援や精神健康についての支援は、今後ますますニーズが高まっていくと思われます。

そこで、HIV陽性者にとってのよりよい生活支援を考えていく材料として、多様な立場のHIV陽性者から、HIV感染がわかったあとの生活について語っていただくことにしました。仕事をするうえでどんな難しさや大変さを感じたか。職場の対応はどのようだったか。職場に望むことは何か……。彼らの経験はもちろんその人個人の経験ではありませんが、そこからHIV陽性者にとっての困難さや必要性について汲み取れるものも少なくありません。また、薬物使用の経験がある2名の語りからは、薬物使用のきっかけや常用に至る心理的・身体的・状況的な経緯を知ることができるでしょう。回復の途にある2人の語りには、何が彼らにとって力になるのかが示されています。

冊子は、事例ごとに問題の整理と支援のポイントが書かれています。事例をもとに、「この事例では、何がよりよい方向へ向かうポイントとなり、どんな点がHIV陽性者の生活を妨げているのだろうか」と考えたり、「自分(の職場)なら、どんな支援ができるだろうか」と具体的に検討したりするのもよいと思われます。冊子に登場する15名はすべて仮名を用い、本人が特定される情報には若干の修正がされていますが、大筋、ご本人の生活をそのまま表すような記述となっています。

HIV陽性者への何らかの支援にかかわるみなさんにとって、本冊子がよりよい支援を考えるための一助となれば幸いです。

## 就労とHIV

### HIV陽性者の相談を聞く立場から

この冊子にまとめられた今回の調査では、「就労とHIV」のテーマにフォーカスして事例を収集しています。

その背景について、地域でHIV陽性者の相談を聞いている立場から、少し書かせていただきます。

職場で話していない個人情報、誰にでもあると思いません。しかし、自分の何らかの問題が就労に影響が及ぶとなると、やはり職場の管理者や同僚には知っておいてほしいと願うのは、自然な感情でしょう。

HIV陽性である人たちが伝えることを検討するさい、その根底にある不安は、それを伝えるという行動の結果、どのような影響が労働者である自分への評価や職場の人間関係に及ぶのかということです。

全国1203人のHIV陽性者が回答した当研究班の調査結果によると、職場で同僚や上司にHIV陽性であることを告げている人は10%前後で、告げずに働く人が多くを占めている現状があります。

また、その一方で、働く人のうち42%が感染を知った後、離職・転職を経験しており、その理由のなかにはHIVとうまく付き合うために発生したものも含まれていました。HIVと共に暮らす前提の生活スタイルへの調整を、転職をすることで実現しているわけです。この時期は、相談のニーズが発生するタイミングでもあります。

周囲に感染の事実を伝えた場合、まったく自然に受け入れられたという経験者も存在します。しかし、事実を知らされる側に準備がなかった場合は、驚かれて「あとどれくらい生きられるの?」と余命が短いと決めつけられるような反応をされたり、「今の医療はどの程度、発達しているの?」という知識を得るための質問攻めにあったり、「どんなふうに感染したのか?」というプライベートな質問をいきなり受

けて戸惑わされたりもします。社会の理解のなさが、HIV陽性者本人にしわ寄せされていることが、相談者の語りからわかります。

このように、社会の認識はまだ医学の進歩や社会制度の整備には追いついていません。とくに疾病にたいするネガティブなイメージは、HIVが発見されて25年たった今でも払拭されていません。

こうした社会環境のなかでは、多くのHIV陽性者は自分の感染を周囲に伝えずに過ごすことが多くなります。もちろん、病名を隠すことの精神的な負担感を75%以上の人を感じているという結果が調査で示されているように、それは本人のストレスを増すことでもあります。

就職活動を続けるなかで、障害者枠にこだわるHIV陽性者がいます。隠している状況で働くことは非常に大きな精神的な負荷がかかるので、そうした負担を避けたいという思いが行動の根底にあります。HIVを持っていることを前提に働ける職場環境、地域の環境、生活が保証されることを、自らの力で手に入れようとしているのです。

HIVと共に暮らす人びとの姿が、まだまだ社会のなかで見えない存在になってしまっている現状があります。しかし、地域で相談にかかわるかたがたが、HIVと共に生きる人びとの相談支援にも目を向けることで、この状況が少しずつ変化していくことを期待しています。

(生島嗣・ぶれいす東京)

平成20年度厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策研究事業)  
地域におけるHIV陽性者等支援のための研究班

生島嗣(特定非営利活動法人 ぶれいす東京)

野坂祐子(大阪教育大学)

## この冊子の使い方 研修等での活用を含めて

この冊子は、HIVと就労、薬物などの問題について理解し、支援の実践に活かすために、さまざまな使い方をしていただくことができます。収められた事例には、年齢や性別、セクシュアリティなど多様なHIV陽性者の生活の状況が紹介されています。HIVにかんする現状を理解するために個人ワークをしてもよいですし、支援者向け研修などで活用していただくこともできます。以下の活用例を参考に、この冊子を役立てていただければと思います。



### 個人ワークとして

**1** 各事例には、キーワードと簡単な用語解説がついています。HIV陽性者への対応経験が少ないかたは、まずは事例を読んで、用語解説も参考にしながら現状を理解してください。巻末のHIV/エイズの基礎知識Q&Aもご参照ください。

**2** ご自分の立場で、それぞれの事例に接するとしたら、どのように感じたり、対応したりできるか考えてみてください。

社会内にあるさまざまな資源を活用するために、現在、つながりのある資源で活かせるものはどれか、また新たに開拓する必要のある資源は何かを検討しながら、実際に資源のリストを増やしていくとよいでしょう。

支援者自身が、多様な現状を知り、たくさんの社会資源と連携しておくことは、支援者の準備性を高めます。

### 研修等での集団ワークとして

**ワーク1** 支援者がグループになり、HIV陽性者の抱えるニーズや困難さを理解します。

**1** 5名程度のグループに分かれて、冊子から1つか2つの事例を選びます。メンバーで、事例の読み合わせをします。

**2** 事例において「支援に必要な情報」と「どんな支援が必要か」を話し合い、それぞれについて異なる色の付箋紙に1つずつ書き出します。メンバー全員で付箋紙を模造紙に貼り、自由にまとめて発表をします。

#### [ポイント]

- さまざまな角度から事例を検討することで、表面上、立ち現れている「困難さ」だけではなく、別の「困難さ」が見えてくるかもしれません。
- 支援者が「必要だと思った情報」が、本当に支援において必要なのか、セクシュアリティやプライバシーをどこまで知る必要があるのかを、あらためて考えることができます。
- 「どんな支援が必要か」を話し合うなかで、支援者が感じた必要性和本人のニーズは、かならずしも一致しない場合が出てくるかもしれません。
- 支援者が、一方的にHIV陽性者の問題やニーズを捉えようとすると、本人の「真のニーズ」を的確に把握できなくなることがあります。

**ワーク2** HIV陽性者への就労支援として、個人にたいするアプローチと雇用主(企業)にたいするアプローチを具体的に考えます。

**1** 下記の内容を記載したワークシートを配布し、選んだ事例について、「採用前の場合」と「雇用中の場合」のそれぞれにおいて、「個人にたいしてできる支援」と「雇用主(企業)にたいしてできる支援」を考え、記入します。

**2** 各自が記入したものをグループ内で発表しあったり、グループで取りまとめた意見を、全体にたいして報告したりします。

#### [ポイント]

- 介入の時期によって、生じている困難さや提供できる支援が異なることがわかります。また、就労支援においては、個人にたいする支援だけではなく、雇用主(企業)への介入(相談や啓発等)も重要です。
- 本人のニーズに合わせた支援を行なうことは、HIVに限らず他の疾患を持つ就労者と変わりはないことを理解すると、これまでの就労支援の経験が役立つことに気づくことができます。

(ワークシート見本)

	個人にたいしてできること		雇用主(企業)にたいしてできること	
	支援のニーズや困難さ	提供できる支援	支援のニーズや困難さ	提供できる支援
採用前の場合				
雇用中の場合				



## 職場や自分で 環境調整が できた事例

就労1 HIV感染を打ち明けたことでの  
デメリットは、一切ありません

職場の環境調整が得られた外資系企業での就労

【タカユキさん／40代男性／2008年告知】

就労2 現在は病気のことより、仕事のスキルのことが  
気になるようになりました

体調不良で退職、障害者枠で外資系企業への再就職

【コウジさん／30代男性／1996年告知】

就労3 自分で気をつけていれば、  
飲食店での勤務も大丈夫

飲食店での勤務後、障害者枠で就職活動中

【テツオさん／40代男性／2000年告知】

就労4 HIV感染をきっかけに、  
やりたいことをしてみるようになりました

フリーランスで就労中

【ツグミさん／20代女性／2003年告知】

就労	<b>HIV感染を打ち明けたことでの</b>
	<b>デメリットは、一切ありません</b>
1	職場の環境調整が得られた外資系企業での就労
	<p><b>タカユキさん</b> 40代／男性 2008年告知</p> <p>——(PROFILE)——</p> <p>外資系企業に勤務する40代のタカユキさんは、HIV感染を職場に伝え、定期的に社内の医療従事者との面接を受けながら仕事を続けています。疾病休暇の制度も充実しており、会社も障害者の雇用に慣れています。</p>
keyword	障害者の雇用 人事トレーニング 産業医 外資系企業

## 事例の概要

タカユキさんが勤める外資系企業は、さまざまな疾患や障害にたいしても差別がなく、障害者の雇用にも積極的です。日頃から社内での啓発がなされているほか、人事担当者の社員向けのトレーニングにも障害者雇用にかんする内容が盛り込まれていると言います。実際、タカユキさんがHIV感染を告げた時も、HIVの知識を持った上司によって、すぐに業務内容の調整をもらうことができました。

休職中も有給で疾病休暇をとることができ、復職時には、産業医との面談を受けながら勤務時間が調整できるため、体調に無理のない程度にスキルを維持することができると言います。

HIV感染後も職場でデメリットを感じたことがないというタカユキさん。彼の経験から、企業側のさまざまな取り組みや制度による職場の環境づくりがいかに大切であるのかをみることができます。

## HIV感染を知った時

2007年、40℃の熱が続き、呼吸が困難なほどの状態になりました。**カンジタ**の症状もひどかったです。その時は1週間程度で熱が下がったものの、医師にはアレルギーではないかと言われていました。

翌年、ふたたび40℃以上の高熱が続き、皮膚科を経由して、入院をしました。何回かひどいカンジタの症状が出た時に、自分でインターネットの情報を調べて、「(カンジタは) HIVの日和見感染の可能性もある」と読んだものの、身に覚えもな

く、自分は関係ないと思っていました。血液検査の結果、陽性であると告げられた時には、「なんで自分が……!？」と驚きました。

告知後、すぐに転院。**CD4値**が3しかなく、すぐに服薬を開始しました。告知から2日後、病院で2時間、薬についての説明を受けました。下痢や吐き気などの副作用がありましたが、CD4値は110まで上がりました。

告知を受けた当日からインターネットで情報を集め、Q&Aや他のHIV陽性者のブログを読み、自分なりにHIVについて理解していきました。それまではHIVはいつか死ぬというイメージが強かったのですが、情報を集めてからは、糖尿病と同じ、慢性疾患というふうに捉えられるようになりました。

最初の検査で「**判定保留**」の結果が出た時点で、すぐに妻にも感染を伝え、検査を受けてもらいました。日頃から妻には何でも話すほうなんです。妻は驚いていたものの「しょうがない」と言うだけで、とくに問題は起きていません。

## 仕事について

告知を受けた当時、新たな事業の立ち上げにかかわっていたため、出張も多く、多忙でした。告知の3日後、上司とプロジェクト・リーダーにHIV感染について話し、1か月間の予定だった国内出張を1週間にしてもらいました。上司がどれだけHIVの知識を持っているか心配でしたが、上司のさらに上司にあたる人が、欧州でHIV抗体検査の器具をつくる仕事をしていたこともあり、話した時にすぐにCD4値を尋ねてくるくらいHIVの知識がある人でした。

勤務先は外資系企業で、他の疾患や障害にたいしても差別がないと感じています。たとえば職場で配布される英文のニュースレターにはつねに啓発記事が掲載されており、障害者の雇用にも力を入れています。人事のトレーニングプログラムには、「障害者と働くこと」という項目が含まれていますし、実際に障害者を雇用したさいには1年間のトレーニングを行ない、自閉症などの精神疾患や車椅子使用者、視覚障害

者などが一緒に働いています。

プロジェクトが一段落した時点で、3か月間休職をしました。休職中は満額有給で、さらに90日間の疾病休暇の制度を活用してから復帰しました。

自分の性格上、隠し事をするほうではないので、職場の同僚にも打ち明けておこうと思いました。将来的に、副作用が起こることを考えたからです。疾病休暇をとる前に、信頼している上司と同じプロジェクトのメンバーに話をしたところ、大きな反応はなく、「ふだんどういうふうに気をつけたいの?」と聞かれたくらいでした。楽天的なほうなので、もし打ち明けて職場に居づらくなったら辞めればいやと思っていた部分もあります。けれど、実際には「(休暇が終わったら)安心して戻ってきてください」と言われました。

復職にあたっては、産業医と面談をし、CD4値(当時は115)を伝え、今後の勤務について話し合いました。産業医からは1年間休むように言われました。休職中は健康保険組合から支給金を受け取れるものの、技術的な面などで職場復帰が難しくなることが不安でした。そこで、産業医の指導の下、当面はコアタイムである11時から15時までの3時間勤務を続けることにしました。フレックスタイム制なので、コアタイムさ

### ことば

**カンジタ** カンジタ症。カビの一種が原因。免疫力が低下すると発症することがあり、エイズ発症の指標とされる。性器以外に咽喉にも発症する(口腔カンジタ)。

**CD4値** CD4陽性リンパ球。白血球の種類のひとつで、免疫全体を調整している。健康なときは血中1μl中に700～1500個ある。CD4陽性リンパ球にHIVが感染すると内部でHIVが複製され、CD4陽性リンパ球は壊れ、その数が減るため、免疫不全の進行度合いを見る指標とされている。

**判定保留** 即日30分検査(抗体迅速検査、イムノクロマト法)では、抗体なし(陰性)の反応が出れば感染していないことは確実であるが、感染していないのに抗体反応が出てしまうことが100人に1人くらいある。これを偽陽性と言う。そのため迅速検査では陽性結果が出た者にたいしては偽陽性の可能性を考慮して陽性と断定せず、「判定保留」として結果が伝えられる。その後、かならず確認検査を行なうことになっている。

## 支援のためのポイント

タカユキさんが勤める外資系企業の取り組みからは、HIV陽性者が働きやすい環境づくりのポイントが見えます。

まず、社員がHIVについて正しく理解していること。タカユキさんの上司は、たまたまHIVに直接関係する仕事にかかわっていたこともあって、HIVの知識があったようですが、日頃から会社が疾患や障害にたいする差別をなくすための啓発に力を入れていたことも影響しているでしょう。具体的に、人事担当者による一般の社員向け研修の内容に障害者の雇用や就労後の支援が含まれていることも、障害を持つ人の働

きやすさにつながっていると考えられます。

また、就労を継続するための支援体制として、さまざまな制度が用意されていることも大きいでしょう。タカユキさんは、疾病休暇の制度を活用しながら有給で休職期間を過ごすことができ、安心して治療に専念することができました。職場復帰後も、社内の医療従事者と相談をしながら、勤務体制を調整できています。

社員一人ひとりの知識や理解と、会社の福利や制度の両輪によって、HIV陽性者のみならず、さまざまな立場の人びとが働きやすくなるといえます。最近では、さま

ざまな人たちがともに働くことが企業の持つ力を強くするという「ダイバーシティプログラム」を実践する職場も増えてきています。多様さ(ダイバーシティ)のなかには、男女という性別だけでなく、病気や障害の有無、性的な指向の多様さなど、さまざまな多様さの広がりが含まれています。

私たちがかかわった過去の調査では、HIV陽性者の約4割は、感染を知ったあとに離職・転職をしています。その理由のなかには、起こっている事実をうまく説明できずに、むしろそれを避けようとして転職したという人が含まれています。

就労	現在は病気のことより、仕事のスキルのこと
	2 気になるようになりまし
2	体調不良で退職、障害者枠で外資系企業への再就職
 <b>コウジさん</b> 30代／男性 1996年告知	—(PROFILE)— 30代のコウジさんは、静かな雰囲気をもちながらも、仕事の話になると非常にエネルギー溢れる姿勢をみせる男性です。以前の職場で、過労による体調不良で退職したあと、外資系企業に障害者枠で採用されました。
keyword	就職活動 障害者枠 外資系企業

### 事例の概要

体調不良のため、自らHIV検査を受けたコウジさん。当時は接客業に従事していましたが、職場にはHIV陽性について伝えなかったため、服薬時には周囲の目が気になって、つい飲みそびれてしまうこともありました。

その後、担当業務内容が拡大し、仕事量が急激に増加していきました。やりたい仕事ができなばかりか、ストレスもたまる一方で、心身ともにコントロールが難しくなり、体調を崩してしまいました。

それを機に退職をしたコウジさんは、次の仕事では、身体的な負荷がないよう休みをとりやすい職場を望んでいました。当初、一般枠での就職活動もしていましたが、HIV陽性を隠す心理的負担もあり、一般枠と並行して障害者枠にも応募していくことにしました。コウジさんの新たな就職先である外資系企業では、日本支社においては免疫障害者の採用は初めてであったものの、対応は適切で、就労後の勤務体制も良好なようです。

### HIV感染を知った時

10年前、仕事でもめまいがひどく、座ってもいられない状態になりました。当時は、接客業をしていましたが、一人でのめまいで廊下をまっすぐに歩けなかったほどです。病院で検査をしたものの病名がわからず、身に覚えがあったので自分から保健所に行ってHIV抗体検査を受けました。

HIV陽性を告知された時には、「やっぱりそうだったか」と思いました。ショックでしたが、しょうがなかったかなという気持ちで

した。それまで**微熱や寝汗などの症状**もあったので、**ゲイ雑誌**で調べて、漠然とHIV感染の可能性を考えていたからです。

保健所で医療機関の情報を紹介され、受診しました。コーディネーターナース(外来看護師)からいろいろ話を聞きましたが、病気そのものより、当時はその後の医療費のことが一番のストレスでした。

最初、3剤を服用する**HAART**の治験を受けたのですが、副作用の下痢がひどく、1週間で薬を切り替えました。でも、日常生活に制約がかかるほどではなく、めまいも改善されていきました。

当時は昼からの勤務体制だったので、午前中に病院へ行くことができました。仕事を休む必要はなかったものの、月に1回の通院を生活のサイクルに入れて考えなくてはならないのは、ストレスでした。何かと不安になって、夜間に救急外来に行ったこともありました。結果は何もなかったのですが。

1日に**3回**(計20錠)の**服薬**は、人目につかない職場環境だったので可能でしたが、定期的に服薬を続けることの重要性についての認識が低く、忙しいとつい飲み忘れてしまいました。服薬を他者に見られなくて、周囲に人がいるのを気にしているうちに薬を飲みそびれてしまうこともありました。現在は日に2回の服薬で薬の量も減りましたが、カプセル剤は冷蔵保存しておかねばならず、最初のうちは職場の冷蔵庫に置いておいたまま忘れてしまうこともよくありました。今は服薬時間にアラームを鳴らすようにしています。

### 仕事について

感染がわかった時には、職場にはHIVのことを知らせませんでした。しかし、担当業務内容が拡大し、仕事量が増加するにつれ、急な出張を申し付けられることも多くなりました。企業が縮小化するとますます人手不足になり、体調が悪くても出勤しなければならなくなっていました。やりたい仕事からも遠ざかり、ストレスも高まる一方、心身ともにコントロールができなくなっていることを感じていました。その頃、職場で過呼吸発作を

起こし、部署を変えてもらえることになりました。

しばらくは意欲的に仕事に取り組んでいたのですが、その後、会社の経営方針が大幅に変わり、自宅に帰れず、ウィークリーマンションで生活しながら勤務する状況になりました。具合が悪くても、体調管理ができていないことを責められるような社内の風潮があり、無理を重ねるしかなかったのです。

HIV告知を受けてから約6年がたった頃でしたが、体を壊し、長期間入院をすることになりました。それがきっかけで退職したのです。

そんなことがあったので、再就職ではHIVという障害を理解してもらえる環境で働きたいと望みました。体調に合わせて休める職場を求めました。一般枠での就職活動もしましたが、条件がとりわけよいわけでもないし、HIV感染を隠すのも負担に感じました。しかし、障害者枠だけで探す選択肢が狭まるので、一般枠と並行して応募を出していったんです。

結果、一般枠と**障害者枠**のそれぞれで2社ずつ面接を受けました。すでに、免疫障害者の採用について実績がある会社もありました。前例がある会社では、とりたてて社員同士が

気を遣うわけではないけれど、体調を崩した時にはお互いが配慮したり、欠勤をカバーしあっているようでした。

別の外資系企業では面接時に、勤務するうえでどういこうところに気をつけてほしいかを聞かれました。自分からは、健康管理に努めるが、避けられない時には体調を戻す時間がほしいこと、周囲に事情がわかっている人がいると助かるということを伝えました。免疫障害者の雇用は、日本支社では初めてのことで、人事課や配置される部署でも気をつけながら受け入れてくれました。上司も適度な距離をとりながら「どうですか」と聞いてくれます。自分も会社もHIVのことを気にしながらスタートしたけれど、現在は病気のことより仕事上のスキルのほうが気になるようになりました。HIVについての問題は少ないが、同僚に薬を見られたら疾患名が知られてしまう心配があります。

今後は、仕事と私生活のバランスをとった生活をしていきたいです。職場では、セクシュアリティや障害のことを聞かれたり知られたりすることが不安で、あまり積極的に付き合いをしていません。職場でどんなふう人間関係を築いていくか。他のHIV陽性者の話を聞いて参考にしています。

### ことは

**微熱や寝汗などの症状** 感染後の症状としてこれらが生じる例はあるが、かならずしもすべての感染者にあてはまるものではない。

**ゲイ雑誌** 男性同性愛者向け雑誌。現在、月刊発売されているものに3誌ある。基本的にポルノ雑誌であるが、イベントなど同性愛者コミュニティの動きや、NGOとの連携でエイズ情報を伝えるなど、同性愛者向けの重要な情報伝達ツールとしての役割も果たしている。

**HAART** 多剤併用療法。カクテル療法とも。1996年頃から、複数の抗HIV薬を組み合わせで行なう治療法が大きな効果をあげている。

**服薬回数** 現在では、1日に1回の服薬がもっとも多い組み合わせになっており、次いで1日に2回という服薬の組み合わせも普及し、職場で薬を飲む必要性は低くなってきている。

**障害者枠** 障害者雇用制度を利用すること。障害者雇用促進法では、一定人数以上の企業あるいは地方公共団体は、決められた割合の障害者を雇用することが義務づけられている。

### 支援のためのポイント

コウジさんのようにHIV感染が判明したのが10年以上前の時期である人たちのなかには、告知後、十分な情報を得られにくかったり、初期の抗HIV薬による治療において服薬量や副作用などで困難を感じたりした経験を持つ人が少なくありません。この10年の間に、副作用が少ない薬剤がかなり開発されてきました。こうした周囲に相談しにくかったという経験が、現在の心理的負担感やネットワークの狭さなどにつながっている場合もあります。支援においては、現状のみならず、医療従事者との副作用についての相談や薬剤の変更も含めた相談を投げかける必要があります。また、必要に応じてストレスの軽減やネットワークの広げ方についての具体的な方法を相談してみるのも役に立つかもしれません。

HIV陽性であることを職場に伝えていない場合、体調不良が生じた時に雇用側はその事実を説明しづらくなり、無理を重ねるしかない状況に追い込まれることもあります。コウジさんが以前勤めていた会社のように、体調管理は社員の自己責任であると考え、体調不良や病気について批判的な視線が向けられやすい場合は、とりわけHIV陽性者は働きにくいと感じてしまいます。

社内でのカミングアウトを考えるさいには、社内全体に知らせるのか、人事と上司だけに知らせるのか、部署内の同僚全員に知らせるのかなど、さまざまなレベルで検討する必要があります。本人の希望やニーズ、職場の状況などを考慮しながら、どのレベルでのカミングアウトをするか、事前に検討しておくといでしょう。

体調に合わせた勤務を望んで障害者枠での採用も視野に入れたコウジさんは、外資系企業への転職を果たしました。人事担当者や配属部署の社員の理解があること、会社の制度が整備されていることによって、HIV陽性者にとっても働きやすい環境づくりがなされています。企業側にとっても、社員の理解を促進することで新規採用時にHIV陽性者をスムーズに採用することができますし、また雇用している社員がHIVに感染した場合にも、その社員の体調を配慮していけば、働き続けてもらうことができます。さまざまな疾病や障害の一つとしてHIVを理解することを社員教育の一部に含めていくことで、HIV陽性者の採用や雇用継続をしやすくすることができます。

ことば

**梅毒** 性感染症の一つ。梅毒に感染していると、HIVへ感染しやすくなるので、医師は検査をすすめたと思われる。**手のしびれや頭痛** これらの自覚症状が薬剤の副作用かどうかは不明。**ハローワーク** 公的な就労相談機関。**職場での出血処置について** 血液を介して感染する病気には、B型やC型の肝炎など、HIVよりもより感染力の強い疾患がある。医療や救急の現場では、血液や体液による感染防止の方針として、だれもが病原体を持っているという前提で、血液や体液の取り扱いに注意し、血液に直接触れない手立てがとられている。これをユニバーサルプリコーション（普遍的予防措置）という。

「したらよいか」などと具体的に質問をされ、対応策を考えてくれました。勤めている間、HIVにかんして否定的なことを言われたことはなかったです。

しかし、求人票に記載されていた勤務時間よりも毎日1～2時間も超過勤務があったので、体調的に就労が難しくなると考えて、その店は1か月で辞めました。次の勤務先は、勤務時間や残業時間が明確に決められている店にしたいと思っています。

ハローワークからの紹介で、身体・知的・精神障害者の就労支援をしている団体のサービスを利用したのですが、おもに知的障害者の就労支援をしているところだったので、適性検査を受けに行ったものの、自分が求めるものとは違っていました。でも、失業給付の申請をし、受給することができたのは、非常に助かりました。

今は障害者枠で仕事を探しています。勤務で無理が重なると、倒れたりするのではないかと不安があるからです。HIV感染については、勤務先に知られていても知られていなくても、どちらでもかまわないんです。伝えることにたいして別に不安はありません。むしろ周囲に知ってほしいという気持ちのほうがありますね。HIV陽性者も隠れているばかりではなく、もっと社会に出て行って、同じような疾患の人が苦しまないよう周囲に知識を持ってもらうようなきっかけづくりができるといいんじゃないかと思います。

民間支援団体に来て他のHIV陽性者に会ったり、病院の患者会などに参加したりして他の人の話を聞いたことで、他の人たちが大変な思いをしていることを知りました。何かアクションを起こしていくことで、何かが変わっていくのではないかと期待しています。

### 支援のためのポイント

HIV感染がわかり、服薬を開始しても、これまで通りに仕事をしていくことは十分可能です。しかし、療養生活を続けるなかで、体調の変化が生じたり勤務の状況によっては転職を検討することもありうるでしょう。転職によって療養生活における負担が少なくなることもあるでしょうし、一方で、中高年期を迎えてからの大きな生活の変化や業種変更は、新たなストレスとして感じられるという難しさを伴うこともあります。

テツオさんは、転職先を探すにあたり、一般枠と障害者枠の両方で応募することにしています。テツオさんの場合、それ以

前に失業給付手続きを受けるさい、ハローワークの担当者にHIVのことを伝えていたことも、障害者枠を利用するためのステップになっています。HIV感染のことを明らかにせずに求職活動をする人にとっては、体調や通院について懸念しながら自分で決めなければならないストレスがあるかもしれません。

調理の仕事に限らず、仕事中的ケガや事故が起こりうる業種では、安全な傷の手当てが気になるところでしょう。どんな仕事でも、ケガや事故の可能性はあります。他者の血液に触れることでの二次感染を防

ぐための気配りや準備ができていないこと（ユニバーサルプリコーション）は、誰にとっても働きやすい職場といえるでしょう。

また、体力的に負担をかけないように、障害者枠で働くことを選択する人もいます。テツオさんのように、体力的な面だけではなく、周囲に知ってもらえることで安心感が得られると感じる人もいます。

就労	自分で気をつけていれば、
	飲食店での勤務も大丈夫
3	飲食店での勤務後、障害者枠で就職活動中
 <b>テツオさん</b> 40代／男性 2000年告知	—(PROFILE)— 40代のテツオさんは、これまで飲食店で調理の仕事をしてきました。HIV感染がわかったあとも、調理の仕事の続けたいと考えています。勤務時間が守られることを第一条件にあげながら、障害者枠での就職活動をしています。
keyword	飲食店 ハローワーク 障害者枠での雇用

### 事例の概要

他の性感染症への感染がきっかけでHIV検査をすることになったテツオさん。体調は良好だったため、通院と服薬をしながら飲食店での勤務を続けていましたが、体調の悪化と労働条件の問題から、辞職することになりました。飲食店での再就職を懸念する声もありましたが、前例もあると聞いて、同じ業種での就職を希望。ハローワークで一般枠と障害者枠の両方で応募することにしました。

転職先では、障害名を伝えたくて勤務をしましたが、店側は調理中のケガの手当てにも関心を持ってくれ、適切な対応をしてくれました。超過勤務が理由で辞めることになったものの、とくにHIV感染を伝えて働くことに不利益を感じたことはなかったそうです。

身体的な負担がかからないように、次の就職先も障害者枠で探そうと決めているテツオさんです。

### HIV感染を知った時

2000年、带状疱疹の治療に通っていた病院で、**梅毒**に感染していることがわかり、医師から「念のために、(HIV感染を)調べておきましょうか」と言われ検査を受けました。後日、病院に呼び出されて、陽性の結果を知りました。当時の体調はそれほど悪くありませんでした。HIV感染がわかったあと、すぐに服薬を開始しましたが、副作用もなく服薬を続けています。

### 仕事について

告知を受けたのは、飲食店に転職してすぐの時期でした。HIV感染については、店には伝えませんでした。仕事への影響は別になく、6年間くらい通院をしながら同じ店に勤めました。しかし、徐々に**手のしびれや頭痛**が多くなってきました。さらに労働環境も悪く、残業手当がまったくつかず、それを労働基準局に訴えたことで店側と揉めました。それをきっかけにその店は辞めることになりました。

**ハローワーク**に行き、障害名を伝えて、一般枠と障害者枠の両方で応募を出しました。ハローワークの担当者から企業にたいして障害名を伝えてもらおうと考えました。ハローワークの担当者には、失業給付を受けるさいに、免疫障害であることを伝えてあったからです。

主治医には、飲食店での勤務は無理ではないかと言われましたが、コーディネーターナースには「前例もあるから大丈夫」と言われました。私自身も、自分で気をつけていれば飲食店での勤務も大丈夫だろうと思っていました。また、あらかじめ勤務先に疾患名を伝えておいたほうが、通院時などの説明が楽になるだろうと考えました。

ハローワークの担当者の話によると、障害名を聞いた店側の反応はとくになかったそうで、採用が決まりました。私の障害名は、勤務先と系列店の店長にだけ伝えることになりました。店側から「他の店員には言わないでくれ」と言われたからです。勤務中、店長から「**調理中に手を切ったら、どう対処**

就労	HIV感染をきっかけに、
	やりたいことをしてみるようになりました
4	フリーランスで就労中
	<p>ツグミさん 20代/女性 2003年告知</p> <p>——(PROFILE)—— 20代のツグミさんは、ハキハキと話し、はつらつとした雰囲気的女性です。現在は、フリーランスで仕事をしながら、毎日、忙しく働いています。</p>
keyword	献血 カミングアウト 雇用形態 恋愛・結婚

### 事例の概要

定期的に行っていた献血のあと、HIV感染が判明。HIVの知識はあったものの、ツグミさん自身の身にふりかかる現実とは捉えていませんでした。親やきょうだいにはHIV感染の事実を伝えていませんが、友人や交際相手にはカミングアウトをしています。

告知を受けた当時、フリーランスで勤務していたツグミさんは、告知をきっかけに一念発起。HIV感染に後押しされるように、海外へ行ったり会社員として働いたり、フリーランスとして活動したりと、充実した生活を送るとともに、服薬を開始し、治療も続けています。

積極的に仕事や人生を楽しんでいるツグミさんですが、この先の恋愛や結婚については少し不安もあるようです。

### HIV感染を知った時

2003年頃、何となく献血を受けたところ、後日、**日赤**から手紙が届き、来所するようにと連絡がきたんです。それまでも献血には数か月に一度くらいの頻度で行っていましたが、呼び出されたのは初めてでした。

メディアからの情報などでHIV感染が広がっていることは知っていたので、連絡を受けて心配になりましたね。私はHIVにかんする知識はわりと持っていたほうで、HIVはコンドームを使わないことで感染することや、現在は死に至る病気ではないことなどを理解していましたが、それでも自分の身にかかわる現実としてはとらえていませんでした。

日赤を訪れると、所長と思われる年配のかたからHIV陽性の告知を受けました。やわらかい口調ではありましたが、

「投げやりになって、他者にうつさないように」と言われた時には、イラッとしましたね。

告知後すぐに、元カレに連絡を入れました。HIV陽性であったことを伝え、彼にも保健所で検査を受けるように勧めたのですが、「絶対にそれはしない」と強く抵抗されました。でも、後日わかったのですが、彼も陽性だったそうです。

告知を受けてすぐに誰かと話したくなり、何でも話せる友人に打ち明けました。それ以来、交際相手にも、タイミングをはかりながら事実を伝えていきます。気のおけない友人にも話しているし、積極的に**カミングアウト**をしているわけではありませんが、自分の病気のことを隠してはいません。

誰に話すかを決める時には、話したことによって下手に気を遣われることがないかどうかを考えますね。今のところ、両親やきょうだいには話していません。

これまでに話した相手には、話したあとで態度を変えられることはありませんでした。みんな最初に聞いた時にはショックを受けていると思いますが……。でも以前、付き合う前に打ち明けたら、相手からの連絡が自然に途絶えてしまったことがありました。拒否されたのでしょうか。恋のチャンスを失い、落ち込んだりもしましたが、今では「そんな男は不要」と思っています。

私も**結婚**を意識する年齢になってきたので、これまでのように気軽に交際相手を選べなくなってしまった感じはあります。カミングアウトしても大丈夫そうな相手としか付き合わなくなりましたね。

### 仕事について

告知を受けた時には、フリーランスで働いていました。HIV感染がわかる前は、やりたいことがあってもぼんやりしているタイプだったんです。でも、告知をきっかけに「いろいろやってみよう」と思えて、意欲的に海外に出かけたり、やりたいことをしたりするようになりました。HIV感染に後押しされたんですね。

その後の数年間は、大好きな海外へ行くなどし、国内で定

職には就かず、通院は年に1回程度でしたが、体調も良好だったのでとくに不安はありませんでした。病気の実感も薄かったのも、HIVによって人生が制限されたと感じることもありません。むしろHIV感染がわかったからこそ、「人生を楽しまなくちゃ」と思うようになり、「できる時に、できることをしなければ」と考えるようになったんです。夢を見ているというのではなく、アグレッシブに生きていこう、と。そう思ったら、何でもやってみようとふっ切れました。

国内外を歩き来するのはとても楽しかったのですが、きちんとした就職をしようと思い就職活動を始めました。自分のパーソナリティが人事担当者の目に止まったようで、採用が決まりました。その後、業種を変えて転職し、正社員からフリーランスに転向しました。病気のことを思うと、正社員として雇用されて安定したほうがいかなと考えたこともありますが、自分の人生に制限をしたくないと思っています。フリーランスの仕事は不安定なので、やはり**医療費や税金などの負担**が大きく感じられるのは事実。一度、仕事を断ってしまうと、次の依頼が来

ないため、ついハードワークになってしまうのも難点です。

でも、今は病気のことはあまり考えずに、夜中まで働いています。たまには「カミングアウトをして優遇されたい」なんて思うくらい(笑)。そうは思っても、自分のなかで「甘えてはいけない」という考えも強いですよね。

もしこの先、体調が変化したら、その時にまたどうするかを考えたいと思っています。**服薬も開始**しました。

最近では、結婚に目が向いているものの、HIV感染のことがいつも胸にあり、踏み出せない部分もあります。体力的にも精神的にもバランスをとって働いていくことが、今後の人生の課題かなと思っています。

### ことば

**日赤** 日本赤十字社。HIV検査の代用としての献血行為を避けるため、告知はしないとしているが、実際には呼び出している告知も行われている。

**カミングアウト** 他者にHIV感染の事実を伝えること。セクシュアリティなど個人の指向を明らかにすることもカミングアウトという。誰に、いつ、どのように感染の事実を打ち明けるかは、HIV陽性者にとって大きな課題。打ち明けるメリットとリスクを考えながら、話す相手を決定していくことが大切である。

**恋愛・結婚** 感染後も恋愛や結婚、出産を選択することはもちろん可能であるが、それらを選択するハードルの高さは人によってさまざま。

**医療費や税金などの負担** 医療費への公費補助である自立支援医療は、住民税等と同様に前年の所得によって個人負担額が決定されるので、フリーランスであれ定期雇用であれ、算定根拠は同じであるが、フリーランスの収入は変動が激しいため、語り手は負担感を抱いていると思われる。

**服薬の開始** 免疫不全が進行し、血液中のCD4やいくつかの数値が基準を超えてから服薬は開始される。

### 支援のためのポイント

ツグミさんのように、HIV感染をきっかけに人生を積極的に楽しんでいこうと考える人もいます。HIV感染の事実の受容には、事前のHIVの知識やイメージ、告知時の状況、個人的なネットワークや社会資源によるサポート体制などによっても異なります。消極的になる人もいますが、積極的に働こうとする人もいます。病気のこととくに制限をしないで働きたいという人もおり、ツグミさんのように自分のやりたい仕事を追求していく人もいます。

周囲へのカミングアウトをどうするか、人によってさまざま。元パートナーや親しい友人にすぐにカミングアウトをしたツグミさんですが、感染を告げたことがきっかけで恋愛が発展しなかったという苦い経験もあ

ったと言います。恋愛や結婚、また妊娠・出産にたいする考えなどを聞きながら、ライフステージごとの課題を整理したり、どんなステップで進んでいくのかを考えていたりするようなサポートも役立つかもしれません。

女性がHIV陽性であることは、時に男性がHIV陽性となることよりも、社会からネガティブな偏見にもとづくイメージを向けられてしまうこともあります。女性のHIV陽性者自身が、同じ立場の仲間と出会うことも、男性に比べると難しい実情があり、ロールモデルが見えにくいという困難さもありません。そうしたなかで、恋愛の対象を選んだり、結婚や妊娠について決定したりするなど将来計画を立てるさいには、困難が付き

まといがちです。本人が気づかないうちに、自分自身のセルフイメージやボディイメージについて、否定的なものが内面化している場合もあります。

HIVの治療技術の開発により、感染後の生活もより長期化しています。本人の健康状態が安定するのに伴い、見据える将来の先も、より長期的なものになっています。ツグミさんの場合も、今後、フリーランスの就労形態のまま働き続けるかもしれませんが、働き方やライフスタイルについて検討したいと思う時期が来るかもしれません。その時には、地域の資源を活用しながら考えていく必要があるでしょう。



## 業務上の 問題をかかえた 事例


就労5 海外駐在では、HIV陰性の  
結果の提出が必要なんです

**海外赴任にさいし、会社がHIV検査の結果の提出を要求**  
【ダイキさん／30代男性／2003年告知】

就労6 プライバシーを守るためには、  
個人情報をきちんと管理する体制がなければ  
**公共交通機関の運転手、服薬の報告を悩む**  
【ノリユキさん／30代男性／2005年告知】

就労7 自分の病気や働き方のことを、  
周囲に理解してほしかった  
**職場にて告知後、就労環境が悪化し辞職へ**  
【コウヘイさん／30代男性／2002年告知】

就労8 自分のことより、周囲に迷惑を  
かけていることが気になって  
**HIV陽性を伝えたところ自宅待機を強制され辞職**  
【ヒビキさん／20代男性／2007年告知】

就労	海外駐在では、HIV陰性の
	結果の提出が必要なんです
5	海外赴任にさいし、会社がHIV検査の結果の提出を要求
	ダイキさん 30代/男性 2003年告知
keyword	海外赴任 HIV検査結果の提出 入国拒否

## 事例の概要

保健所でHIV陽性を知ったダイキさんは、NPOに相談をしながら、妻へのカミングアウトをしました。

勤務先にはさまざまな差別があると感じているため、HIV陽性のことは会社に言えないと思っています。社会保険を使って医療費を支払ったら、病名が会社に知られてしまうのではないかと不安に感じていた時もありました。

ダイキさんの職場では、海外の支店に出張する機会があるものの、海外の医療体制には不安があるうえ、入国時の荷物チェックで抗HIV薬が見つかったら没収されてしまうのではないかと心配もあると言います。

さらに、最近、事業の延長から海外現地に駐在する必要が出てきました。ところが、中国に6か月以上駐在するさいには、HIV検査が陰性だと示す証明書の提出が求められるとのこと。ダイキさんはすっかり困ってしまいました。会社の赴任命令をいつまでも拒むわけにもいかず、さりとて検査結果を出すわけにもいかず、妻の体調不良を理由に断ったものの、今度は妻を巻き込んだ嘘をついたことの罪悪感にさいなまれるようになってしまいました。

## 感染を知った頃

2003年、仲のよかった人が**検査イベント**に行ったのを機に、私も保健所でHIV抗体検査を受けました。自分は陰性だと信じて疑っていなかったため、結果を聞きに行ったあとで遊ぶ予定を入れていたくらいです。陽性という結果は、なかなか受け入れられませんでした。

病院への紹介状を書いてもらうさい、具体的な情報を求めたのですが、「どこの病院も同じ」と言われ、分厚い冊子から行きやすい場所の病院に決めました。ところが、その病院に電話をすると、「うちは症例が少ないから、ほかに行ったほうがいい」と断られてしまった。保健所で説明を受けたのと違うじゃないか、と思いました。民間支援団体に電話をし、病院によって患者数が異なることや、対応が少し違うことを聞きました。紹介された病院では、医師と会うまえにコーディネーターと会って治療方針などを話すことができました。

HIVは、いつ、誰から感染したのかはわかりません。学生時代に付き合っていた彼女からかもしれない。妻への告知や妻にうつした可能性を考えて心配になりました。民間支援団体に相談をし、今後の仕事のことや妻のことを話しました。同時進行でいろいろな問題を片付けようとしたら、「一つずつ、ゆくり解決していきましょう」と言われました。一つひとつリストアップして、取り組んでいけたのはよかったと思います。妻へのカミングアウトもできました。今は、自分が他のHIV陽性者に「一つひとつやっついていかないと……」と言っていたりします。

## 仕事について

勤務先は、医療・化学品・薬品関係の企業です。古くさい風土のある職場で、女性差別や年齢差別が蔓延しています。そんな職場なので、HIV感染のことがバレたら会社にいられないだろうと思いました。もし、服薬を開始したら、保険から**病名が会社に知られてしまう**のではないかと考えたりしました。言えたら楽になるだろうなと思ったことは何度もありますけ

どね。通院も楽になるでしょうし、薬の副作用が出た時も説明しやすいかもしれません。

通院は、営業の外勤の合間に通えるので大丈夫です。たまにふらつきがありますが、屋外のベンチで休んだりして対処しています。事前に主治医が副作用について説明してくれていたため、対処しやすかったです。ただ、**服薬による影響**で健康診断の結果が「要再検査」となりやすく、会社から精密検査を受けるよう求められるのが不安の種になっています。

海外にある支店に出張する機会があるのですが、海外の医療体制では、何かあった時の対応が心配です。これまで海外勤務の話は避けてきたのですが、あまり拒否し続けても、「なぜ、そんなに嫌がるのか」と不審がられるので応じました。

入国時の荷物チェックでは、**大量の薬**が見つかった場合、没収されてしまうのではないかと心配になります。手荷物にも薬を入れて、万一、スーツケース内の薬が取られても、何とかできるように工夫したりしました。

事業の延長から長期赴任の必要性も生じています。中国での駐在にはビザが必要で、1年以上住む場合は、国公立の病院でのHIV陰性の証明書が必要になります。会社は、社員がHIVである可能性をまったく想定していないのです。

もし、HIVによって駐在が不可能になれば、会社は「アテが外れた」と思うでしょうし、「なぜ早く言わなかったのか」とも

言われるかもしれません。今は、妻の具合が悪いという理由で駐在を断っていますが、妻を巻き込んだウソを言ったことで、精神的にかなり参ってしまいました。メンタル面できつくなると、ついHIVと結びつけてしまいます。そんな自分自身に葛藤することもあります。心療内科にも行ったけれど、一般のクリニックに通うのは抵抗がありました。こうした精神面の症状について、HIVの担当医から「**薬の影響**かもしれない」と言われ、拠点病院の精神科を紹介してもらいました。

今でも妻にたいするぬぐいきれない罪悪感があります。幸いにも妻は陰性でしたが、「自分じゃない誰かと結婚していたら、(妻は)幸せになれたのではないかと」考えたり、「今からでもいい人生を歩めるのでは」と思ったりしてしまいます。妻は検査結果を知ったあと、「同じ立場になれば、数か月間、一人で悩ませていた時間を取り戻せるかと思った」と言ってくれました。それを聞いたときには、ただただ胸が押しつぶされるような切ない気持ちになりました。

就労の今後のことは、予測が付きません。海外駐在の件はどうしたらよいか、まったく見通しを持っていません。40歳を越えたら、普通でも転職が難しくなります。短絡的に仕事を辞めても、次に行けないかもしれない。養う家族のことを考えると、発作的には辞められないし。会社の事業内容も変わっていくでしょうから、通院するのも難しくなるかもしれません。

## ことば

**検査イベント** エイズ啓発キャンペーンのなかでイベント的に検査会が行なわれることがよくある。12月の世界エイズデー前後や6月の検査普及月間などに多い。

**病名が会社に知られてしまう** 服薬を開始するHIV陽性者の多くが、この心配を訴えるが、健康保険組合には個人情報にかんする守秘義務があり、健康保険組合から会社に情報が流出することは禁じられている。

**服薬による影響** 抗HIV薬の服用の副作用として、中性脂肪、コレステロール、肝機能などの数値が上がり、健康診断の二次検診を求められる場合がある。事前に主治医と相談のうえ、対処について検討することができる。

**大量の薬** 1日1回の服薬が主流になりつつあることから服薬量は少なくなっているが、なかには長期間の出張では、副作用止めの薬剤等を含めて大量の薬剤を携帯する必要がある人もいる。海外渡航のさいには、事前に主治医に英文での処方箋を出してもらうよう頼んでおくことで、トラブル時の対処がしやすくなる。  
**薬の影響** 抗ウイルス薬のなかには副作用として抑うつ気分などメンタル面の症状を誘引するものもある。

## 支援のためのポイント

ダイキさんのように、HIV告知を受けたあとの病院探しがスムーズに行かない場合もあります。保健所での説明が不十分であったり、一般的な内容にとどまり、その人のニーズにうまく合っていなかったりする場合があるからです。NPOの電話相談で病院の対応の実際を聞き、別の病院に行くことにしたダイキさんは、その後、コーディネーターと治療方針を話し合いながら、治療を開始できたようです。

妻へのカミングアウトの前には、ダイキさ

んもずいぶん悩みました。しかし、妻に負担をかけている気持ちや、妻を理由にあげて会社にウソをつかなければならないことは、彼にとって新たなストレスとなっています。本人への支援のほかに、HIV陽性者のパートナーにたいする支援も必要となる場合があります。

海外出張にさいし、現地での医療水準の不安、持参する薬の問題を感じています。さらに海外駐在となると、国によってはHIV陰性の証明書が必要になる場合があ

り、ダイキさんのように非常に困る事態になりかねません。ここには書かれていませんが、ダイキさんの場合には国内の顧客とのつながりを強めたり、国内の業務で評価を受けるように努力したりすることで、海外駐在をまぬがれています。ですが、まだまだ安心できない状況が続いています。

会社や社会の制度が、HIV陰性であることを前提とした規則や慣行になっていることはないでしょうか。それぞれの職場や地域で、見直していく必要があります。

就労	プライバシーを守るためには、
	個人情報 をきちんと管理する体制がなければ
6	公共交通機関の運転手、服薬の報告を悩む
ノリユキさん 30代/男性 2005年告知	—(PROFILE)— 30代のノリユキさんは公共交通機関の運転手として働いています。職場にはHIV陽性について伝えていませんが、会社の規定で服薬時には報告することが義務づけられているため、今後の服薬にさいして不安を感じています。
	keyword 服薬 職務遂行上の安全 個人情報の管理

## 事例の概要

特定の相手としかセックスをしていなかったというノリユキさんは、HIV感染を知ったあと、何も感じられないほどのショックを受けました。相手に強い怒りを感じ、HIVに感染するとすぐに死ぬという誤ったイメージから、不安を感じたのです。しかし、他のHIV陽性者にとって話をすることで、感染後の生活の見通しが立ったようです。

ところが、そんなノリユキさんにとって大きな不安材料となっているのが、服薬の開始です。彼の勤務する公共交通機関では、運転中の事故を防ぐために、服薬時にはすべて会社に報告することが義務づけられているからです。HIV陽性について会社には伝えていないノリユキさんは、薬を伝えることで病名が知られる不安と、報告をせずに働くことで懲戒免職などの罰則の対象になる心配の両方を抱えています。

## 感染を知った頃

2005年、骨折の手術の術前検査のさいに、HIV陽性が判明しました。院長に呼ばれて、HIV感染について告知を受け、手術を拒否されて転院することになりました。まるで腫れ物に触るような感じで扱われ、退院時には医師や看護師が外来の待合室から見える玄関先に並び、見送られました。

HIVという言葉は知っていたけれど、**特定の人としかセックス**をしていなかったし、自分には関係ないと思っていました。告知を受けた時はショックでしたが、その後は何とも感じられませんでした。あとで民間支援団体に電話をかけてから、初めて今後の心配がもたげられたんです。

以前、交際していた相手にすぐに連絡を取り、HIV検査を受けてほしいことと、見舞いにくるようにと伝えたのですが、その時は相手にたいする怒りでいっぱいでしたね。「訴えてやろうか」とも思いました。今は、予防をしていなかった自分も悪かったという気持ちですけれど……。

都内にある民間支援団体が運営する他のHIV陽性者と交流できるスペースに来て、出会った人たちが元気で、「感染しても何も変わらないよ」と話しているのを聞いてから、ずいぶん考えが変わりました。それまで持っていた、HIVに感染するとすぐに死ぬというイメージも変わりました。

## 仕事について

告知を受けたのは、就労して6年目のことで、現在も仕事を続けています。

HIV抗体検査を受けるきっかけとなった骨折をした時点で、職場にはしばらく仕事を休むことを伝えましたが、会社からは何も聞かれませんでした。HIVの主治医から「職場にはHIV感染の事実と言う必要がない」と聞いていたので、会社の産業医には話さずでした。

復帰後は、以前と変わらずに勤務しています。月に1回、地域の拠点病院に通っていますが、平日に休みがとれる仕事な

ので通院は可能です。ただ地元のため、病院内で職場関係者に会うことがあります。また、公共交通機関に勤務しているので、同僚の運転する車輦で病院に向かうこともあります。周囲には、喘息で通院していると説明しています。

以前、感染症内科で、飲み屋での知り合いにばったり会い、相手からHIV陽性だと打ち明けられたことがあります。もししたら自分も知り合いに会ってバレるのではないかと不安になり、それをきっかけに転院しました。

最近、医師から服薬を開始することを提案されました。ところが、私の勤務先では、会社の規定により、薬を服用した時はすべて会社に届け出なければならないことになっています。報告義務が厳しく、職員はみな報告をしています。交通にかかわる仕事なので、事故を防ぐのが目的なのですが、提出書類は医師ではなく所長がチェックするしくみになっています。

主治医からは、「抗HIV薬は業務に支障をきたさないの、一切、言う必要はない」と言われて安心しましたが、もし黙っていて処分を受けることになって困る、というのが正直な気持ちでした。社内のリストラが重なっていた時期でもあり、服薬を報告しないことで懲戒免職になるリスクもありました。

介護士に相談したところ、「管理者には病気について伝えたいほうがいいのではないかと」言われ、「(言ったうえで)何か問題が起きたら対応しよう」と言われました。しかし、いざとなると会社には言えず、そのまま現在に至っています。

職場では、かならずしも個人のプライバシーが守られているわけではありません。HIVだと打ち明けたらば、解雇や不当な扱いこそされないと思うものの、管理職や本社には情報

## 支援のためのポイント

ノリユキさんのように、特定の相手としかセックスをしていなくても、コンドームを使わない性行為をすることで、HIVや性感染症にかかる可能性はあります。しかし、本人は思いがけないこととすることも多く、HIV感染の事実を受け入れることが困難なこともあります。ノリユキさんも、相手にたいする激しい怒りや絶望感を感じて苦しみました。他のHIV陽性者と話し、元気な姿を目の当たりにすることで、それまで抱いていたHIVへのイメージが一変したと話しています。告知後のピアサポートは、本人のエンパワメントになるとともに、今後の生活の見通しを持つうえでも、大きな影響力があるといえます。

公共交通機関の運転手として働くノリユキさんの会社では、服薬時にはすべて

会社に届け出ることが義務づけられています。業務中の事故防止が目的ですが、その書類のやりとりには同僚の運転手や事務員などもかかわることもあり、情報管理の観点から問題が残る制度となっているようです。ノリユキさんとしては、プライバシーが守られにくい職場環境のなかでは報告がしにくいと感じています。主治医からは、業務に影響のない薬なので報告の必要はないと言われましたが、彼としては、言わなかった場合に規則違反で罰せられる危険性を懸念しています。また、HIV陽性であることが、人事査定においてマイナスの評価とならないかどうか心配しています。

職場の特殊性から社員の健康管理や安全面での配慮が必要ですが、社員のプ

が伝わっていくと思います。自分が話していない人にまでHIVであると知られるのは耐えられません。

業務の性質上、会社では「病気になった人=危険」であり、「健康状態は管理されるべきもの」という発想が根強いように感じます。定期的な検査とか服薬の申告が義務づけられているのも、この発想によるものでしょう。業務上必要であることは確かですが、プライバシーを守るために、個人情報をきちんと管理する体制がなければならぬと思います。

## ことば

**術前検査** 手術の前に行なう感染症等の各種検査のこと。本事例では、通常の治療が拒否されているが、本来であれば、その医療機関での治療が可能だったはずである。  
**特定の人としかセックス** 性行為の相手が特定の人だけであっても、コンドームを使わない性行為をすれば性感染症に感染する可能性がある。

就労	自分の病気や働き方のことを、
	7 周囲に理解してほしかった
7	職場にて告知後、就労環境が悪化し辞職へ
 <b>コウヘイさん</b> 30代／男性 2002年告知	—(PROFILE)— 30代のコウヘイさんは、食品製造業の正社員として勤務していましたが、上司にHIV陽性を伝えたと辞職をほめかされてしまいます。結果、辞職に追い込まれてしまい、その後は仕事をしていない状態です。
keyword	検査イベント 解雇 辞職

### 事例の概要

コウヘイさんがHIV陽性を知ったのは、正社員として勤務していた時のことでした。誰にも話さずに働くことに不安を感じたコウヘイさんは、上司に事実を打ち明けました。シフト制の勤務体制であったため、体調不良などで欠勤した場合、業務が回らなくなってしまう状況が生じることを懸念したからです。

数日後、本社の役員に呼び出され、HIV陽性の事実を確認され、感染経路についても尋ねられました。反論したものの、会社から退職金を出され、解雇をほめかされてしまいました。納得のいかないコウヘイさんが弁護士に相談をすると、会社は一転、就労を続けるよう伝えてきました。事務職への異動は、体力的には助かるものですが、仕事の割り当てを減らされ、収入も激減したうえ、周囲の批判的な雰囲気に対処できず、やむなく辞職することになりました。

### 感染を知った頃

2002年、地方で行なわれていたHIV検査イベントで即日検査を受け、翌日に感染がわかりました。体調不良が続いていたので、「もしかしたら」という気もありましたが、結果を知った時には「やっぱり」と「まさか」の気持ちが半々くらいでした。友人にはすぐにカミングアウトをしました。知らせなくてもいい人にまで話してしまい、今、思うと精神状態が不安定だったんでしょね。

### 仕事について

当時は正社員として働いていました。誰にも話さずに働き続けることが不安だったので、告知から1か月たった頃、年齢が同じくらいの上司に打ち明けました。それまでも個人的な話をする仲だったし、仕事の責任者でもあったので、シフト制勤務で、人数がギリギリだったので、一人が休むと業務が回らなくなる状況でした。もし、僕が体調を崩して休んだら、周囲に迷惑をかけてしまうと思ったんです。上司の考えを聞きながら今後のことを相談するつもりでした。上司は親身に聞いてくれる雰囲気があり、「わかりました。考えてみます」と答えてくれました。

あとから上司の考えを聞かせてもらえるものとばかり思っていたら、数日後、本社から役員クラスの人が2名来て、別室に呼び出されたんです。そして、いきなり「HIV陽性というのは事実なのか？」と尋ねられました。「そうです」と答えるしかありませんでした。さらに「感染ルートはどういうこと？」「どうやってうつったのか？」など、詰問調で尋ねられて。外国人のパート就労者が多い職場だったので、ドラッグの注射打ちによる感染だったのかどうかを知りたかったのかもしれませんが。

やりとり自体が苦痛でしたが、1時間ほど話を続けたあと、「食品の製造関係のため、病気を持った人を現場で使うと、何かあった時に責任を持ってないので、このままの雇用ができない」と言われました。直感的に、これは不当解雇だと思いま

した。もし自分が解雇されたら、他のスタッフにもしわよせがいきます。だから、「そういう扱いでは困ります」と食ってかかりました。でも、僕も会社の誤解を解くような病気の説明がきちんとできませんでした。会社側は、ハッキリと辞めてくれという言葉は使わなかったものの、規定では退職金が出ない時期であるが支払うという条件を提示してきました。

解雇をほめかされたことには、納得がいきませんでした。HIV陽性者の友人から聞いていた話から、解雇は普通じゃないと思えたからです。上司や役員の対応には強い怒りを抱きましたが、今思えば、上司も初めて部下にHIVを打ち明けられて、ひとりで何かを決めるのは難しかったのでしょう。

その後、弁護士に相談しました。僕が就労を継続したいと伝えると、弁護士は会社の役員らと直談判しようとしてくれました。その矢先、本社に呼ばれ、部署の上司と人事担当者から、「これまでと同じように働いてください」と言われたんです。体調を気遣われ、事務職への異動を提案されました。

事務職へ異動できたのは、体力的には助かりました。それでも、休みを続けて心証を悪くしないように、けっこう無理をしてしまいましたけれど。

新しい部署では、管轄の上司だけが感染の事実を知っており、会社からは「周囲の人には病気のことを言わないように」と言われていました。上司は最初、僕の体を気遣ってくれているように見えたのですが、次第に割り当てられる残業が少なくなり、いわゆる窓際というか、簡易な仕事ばかりあてがわれるようになりました。収入も激減したうえ、辞職するまでの約4年間、上司は何かにつけ病気のことを持ち出し、査定時には「あなたは病気に甘えている」とも言われました。そう言われても、上司が仕事を配分してくれないので、それ以上の仕事はしたくてもできない状況だったのですが……。次第に通院のために休んだり、定時に帰宅したりすることについて、職場内

からも非難的な雰囲気が高まってきました。だんだん職場に居づらいつつ雰囲気ができてきたんです。

自分としては、周囲の人に病気のことを話し、自分の状態や働き方を理解してほしかったんです。周囲からの視線が痛くなるなか、昇給もなくなり、収入は以前の半分程度。徐々に自分のモチベーションも下がっていきました。同僚からは、まるで腫れ物に触るように接してこられ、席も窓際で一人きり。孤独感が強くなり、転職について準備をするようになりました。そして、上司から小言を言われたのをきっかけに、自分から辞めたいと切り出したんです。

今ふり返ってみると、いつ、どんなふうに職場にHIVを打ち明けられるか、もっと考えたり、誰かに相談したりしてから言えばよかったかなと思います。打ち明けられない選択もあったはず。その時は言うしかないと思っていたんです。

仕事を辞めてから2年半がたちますが、現在は仕事をしていません。会社員として働くこと自体にも違和感を覚えるようになりました。会社によってHIV陽性者への対応は違うかもしれませんが。海外の工場に視察に行くと、HIVについての啓発ポスターが貼られていたりします。日本でも、会社の意識が高まり、免疫障害者の雇用の前例ができれば、変わってくるかもしれないですね。

### 支援のためのポイント

自分が仕事を休むことで周囲に迷惑をかけてしまうことを懸念したコウヘイさんは、上司にHIV陽性を伝え、相談をしました。コウヘイさんは、上司から個人的なアドバイスをもらうことを期待していたにもかかわらず、会社の役員に呼び出されてHIV感染の事実を確認される事態になってしまいました。会社側が感染経路を尋ねることは、業務には何ら関係のない質問であり、不適切なものです。また、退職金を持ち出し、解雇をほめかすことも、不当解雇に該当する場合があります。

コウヘイさんが弁護士に相談をすると、

会社側は態度を一変させ、その結果、勤務を続けることは可能になったものの、いわゆる“窓際”の扱いを受けることで、コウヘイさんは辞職を余儀なくされてしまいました。

HIV陽性を伝えたと、明確に解雇を申し渡されない場合でも、上司によるパワーハラスメント行為や不適切な指示、同僚との人間関係や職場の雰囲気などの理由によって、HIV陽性者が働きにくい状況が生まれてしまうことがあります。

この経験のあと、コウヘイさんは仕事に就いていませんが、今後の人生設計につ

いて考えるさいには、過去のさまざまなトラブルやその影響についても、話をよく聴いていくことが求められるかもしれません。

就労	自分のことより、周囲に迷惑を
	かけていることが気になって
8	HIV陽性を伝えたところ自宅待機を強制され辞職
ヒビキさん 20代/男性 2007年告知	20代のヒビキさんは、地元に戻って就職した先でHIV感染の事実を打ち明けたことから、自宅待機を命じられ、辞めることになってしまいました。現在は、HIV陽性やセクシュアリティについても上司に伝えたくて働いています。
	——(PROFILE)
keyword	職場でのカミングアウト 試用期間 障害者控除

## 事例の概要

ヒビキさんがHIV感染について知ったのは、数年間フリーターとして働いたのを辞めて、地元に戻って正社員として就職をした直後のことでした。採用後、飲食業での試用期間中だった彼は、店に迷惑をかけたくないという理由から、店長にHIV陽性の可能性があることを打ち明けました。最初は、彼の体調を気遣ってくれた店長でしたが、翌日の会社の集会に欠席するよう連絡をしてきました。また、確定検査の結果が出るまで、自宅待機をするように言われましたが、ヒビキさんは他の社員に負担がかかることを気にして辞職してしまいます。

その後、噂がたつのを恐れた彼は、別の会社に転職。新しい勤務先では、HIV陽性の事実について社会保険の担当者だけが知っている職場環境のもとで、働くことができています。

## 感染を知った頃

2007年に交際相手からHIV抗体検査を勧められ、「念のため」という軽い気持ちで検査を受けました。陽性であったことは、意外な結果でショックでしたが、動揺したり落ち込んだりすることはありませんでした。体調面でも自覚症状はありませんでした。

## 仕事について

HIV感染がわかった時には、飲食業に勤めていました。専門学校を卒業後、数年間フリーターをしていたのですが、将来のことを考えて、家賃負担のない地元に戻ったあとのことです。社員として雇用された店での試用期間中のできごとでした。

HIV感染について誰に伝えるか、友人に相談したところ、「そういう情報は広がったら止められないから、言うべき人だけに言ったほうがよい」と言われたんです。地方という土地柄、噂はすぐに広がりそうなことも不安でした。入社してすぐの時期でもあったので、まずは店長だけに話すことにしたんです。

若干、迷いはありましたが、当時は自分でもHIVについての知識があまりなく、「何かあってからではまずい」という気持ちがありました。「店に迷惑をかけてはいけない」と思ったんです。自分のことよりも周囲に迷惑をかけることが気になって、店長に打ち明けることを決意しました。検査前に店長と話していた時、「エイズとかだったら困っちゃうけど」と言われていたんですよね。その時は自分でもまさかと思っていたけれど、結果がわかった以上、万が一、何かあって責任を取られる事態になるくらいなら、早めに打ち明けたほうがよいと判断したんです。

店長に検査結果が書かれた用紙を見せたら、「体調はどう？」などと気遣ってくれました。その日は普通に仕事をしたのですが、店長がいろいろ考えている様子だったので気になりました。もし続けて働けるのならそれが一番いいけれど、「明日か

ら来なくていい」と言われるのではないかと心配でした。

その晩、店長から電話があり、翌日に参加を予定していた会社の集会に出なくてよい、と言われました。私が、HIV感染の可能性についてはまだスクリーニング検査の結果にすぎないと伝えても、正式な結果が出るまで病欠扱いにするとされました。会社でも前例がないため、HIV陽性者を雇用するうえでの対策について話し合いをする必要があるのだろうかとも考えましたが、集会を欠席する必要はないのではないかと。そう思ったけれど、会社に迷惑をかけている感があったので、店長の指示に従うことにしました。

急な欠席になってしまったので、一緒に参加する予定だった同僚にも、HIV感染の可能性を伝えました。話を聞いた同僚はショックというより、身近にHIV陽性者がいることをめづらしかっていた感じ。「病気でもお前は前だし、付き合いは変わらない。逆に、集会への参加をやめさせる会社のほうがおかしいのではないかと」言ってくれました。交際相手にも同じことを言われたのですが、その時は、会社が悪いというより、自分のほうが会社に迷惑をかけてしまい申し訳ないという意識のほうが強かったですね。

陽性がかっきりわかった時点で、あらためて店長に結果を伝えました。すると、本社で話し合いをしているので自宅待機をしているように言われました。その後、B型肝炎で入院することになったさい、会社は「退院後に職場復帰をしてくれてかまわない」と言ってくれて、入院中は店長も見舞いに来てくれました。店長としては、私の復帰を迎えてくれる気持ちがあったようです。でも、会社の意向はわからないままでした。結果的に、私が病欠で休み続けると新たな人手を補うことができないと言われたので、辞職することにしました。

いろんな決心をして地元に戻ってきたわけですが、入院中は、自分が人に迷惑をかけているという意識がありました。自

分さえ身を引けば、新しい人員も雇うことができ、職場の人たちが助かるのではないかと。辞めた時はまだ試用期間中だったため、失業給付も受けられず、保険もありませんでした。

HIV感染の噂が立つことも不安だったので、その後は地元を離れ、新しい職場に移りました。他の障害者も働いている職場だったし、今後、服薬を開始してから体調が悪くなることも考えて、職場を統括する立場の人にHIVについて打ち明けました。一番、付き合いのあった人だし、自分がゲイであることも知る人だったので、HIVのことも受け入れてくれると考えたからです。話したら、「何かあったら言ってほしい」と言ってくれ、伝えてよかったと感じました。

現在もその会社で勤務しています。年末調整の時に、**障害者であることの申請**を行ないましたが、社会保険の部署の担当者だけが知っている状況で、個人情報を守られています。シフト制の勤務なので、通院もしやすく、服薬時だけ周囲が気になる程度です。現在の就労状況には、満足しています。

### ことば

**スクリーニング検査** 血液中の抗体を測る検査。まれにいつわって陽性と出ることあるため、その後確認検査を行なう。  
**障害者であることの申請** 障害者は確定申告(年末調整)のさいに障害者控除を受けられる。実際には、会社等に障害者であることを知られることを避けるために控除申請をしない人もいる。

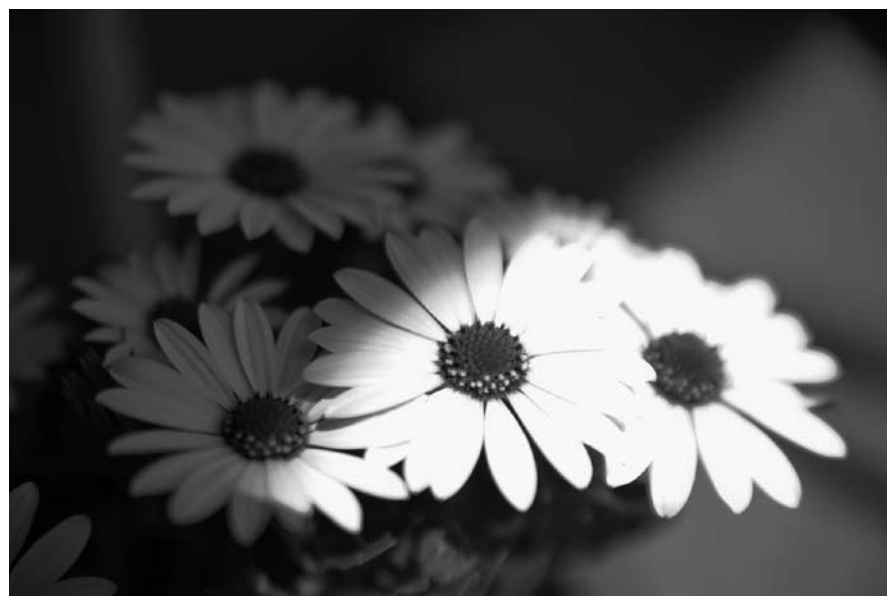
## 支援のためのポイント

ヒビキさんが悩んだように、職場にHIV陽性の事実を伝えるかどうかは難しい判断です。ヒビキさんは、地方という土地柄を懸念し、噂が広がることを不安に感じながらも、採用されたばかりの職場に「迷惑がかかる」ことをおそれて、店長に話すことにしました。会社に迷惑をかけてはいけないと考えると、不安や焦りから判断を急いでしまうこともあるでしょう。とりわけひとりで抱え込んでしまうと、結論を急いでしまいがちですので、信頼できる他者や支援者と、話すことのメリットとデメリット(リスク)を整理していくことが役立ちます。

会社は適切な理由なしに社員を強制的な自宅待機にすることはできません。ヒビキさんも、会社からの説明が不十分であることで、不安を募らせていました。

ヒビキさんの場合、会社が彼を解雇したわけではありませんが、彼は、自分の休職中に人員の補充がなされぬままであることに自責感を抱き、辞めざるをえない気持ちになってしまいました。会社の業務体制の不備がしわよせになって、個人の権利を行使しにくくなるという状況があると、HIV陽性者にとって就労の継続は難しくなるでしょう。

転職先では、HIV陽性であることやゲイであるというセクシュアリティについても上司に受け入れられながら、働くことができています。職場において個人情報がきちんと守られている点も、ヒビキさんが働くうえで安心感につながっています。



## 就労の 難しさを語る 事例

就労9 自分の具合の悪さを  
わかってもらえないと、不満でした  
体調不良で辞職、アルバイトとして勤務  
【リエコさん／40代女性／2006年告知】

就労10 社会保険を利用することで、  
病気が会社に知られてしまうのではないかと不安  
HIVを告げたところ退職を強要、アルバイト勤務  
【ジュンさん／40代男性／2001年頃告知】

就労11 障害者枠での面接のさい、  
「前例がない」と言われショックでした  
体調不良で契約社員を解雇、障害者枠で就労活動中  
【アツシさん／30代男性／2004年告知】

就労12 転職をするなら、ありのままの  
自分を受け入れてほしい  
障害者枠での採用を希望して就職活動中  
【タイチさん／30代男性／2003年告知】

就労	自分の具合の悪さを
	わかってもらえないと、不満でした
9	体調不良で辞職、アルバイトとして勤務
 <b>リエコさん</b> 40代/女性 2006年告知	——(PROFILE)—— 40代のリエコさんは、夫と二人暮らし。仕事をがんばらねばというプレッシャーから、セックスに依存した時期もありました。いつも認められなくてがんばってきたというリエコさんは、現在はアルバイトとして働いています。
	<b>keyword</b> 親との関係 カミングアウト 恋愛・セックスへの依存

## 事例の概要

肺炎による入院中にHIV抗体検査を受けたリエコさん。陽性の結果を知った時には、強いショックを受け、告知から2年たった今でも、その時の衝撃を思い出すと精神的に不安定になると言います。子どもの頃から、親に自分の努力を認めてほしくてがんばってきたというリエコさんにとって、HIVに感染したことは、さらに自分を追いつめるものとして感じられたのでした。

就職後、「がんばっても認められない」という思いから、恋愛やセックスに依存しがちに。結婚を機に正社員からアルバイトになり、HIV告知後は体調不良からしばらく休職をしました。仕事の中断を医師に相談した時は、体調の悪さを理解されず、安易に就労継続を勧められたと感じました。体調が回復してからは、勤めていた会社にアルバイトとして復職することに。

カミングアウトした夫に支えてもらったことは、彼女の助けになりましたが、夫の仕事の忙しさやNPOへの理解の乏しさを不満に感じることもあるようです。ポジティブな将来像が持てないとリエコさんは言います。

## HIV感染を知った時

2006年に、風邪のような症状から肺炎を発症し、近隣の病院に入院しました。その2年前に、数か月間にわたって帯状疱疹や神経痛を患ったことがあったのですが、HIV感染のことはまったく疑っていませんでした。

入院先で検査をして陽性だとわかった時の状態を表すなら、“心が真っ黒けになった”という感じでしょうか。約2年がたった今でも、告知を受けた時期を迎えると、精神的に不安定になります。陽性がわかった時に死んでもよかった、とすら思うくらいです。私って、子どもの頃から親にほめられたことがなかったんですね……。がんばって生きてきたつもりだけれど、陽性の結果を知らされた時には、「お前はもういい」と言われたような気がしました。

HIV感染については、医療従事者と夫のみが知っています。夫へのカミングアウトは、入院先の病棟から。夜中にメールで「すみません。ごめん。別れてもいいです」と伝えたんです。思い切ってメールを書いたというのに、夫からの返信は「大丈夫だよ」と。ありがたかったですね。親に検査結果を言うべきか夫と話し合いましたが、結局、夫婦の間だけで共有することにしました。夫が忙しい時にはあまり私の不安を話せないのも、つらく感じることもあります。

夫は、「HIVって何?」という感じで、あまりわかっていないみたい。私が夫にも検査を受けてほしいと望んでも、結果が怖いのか受けてくれません。

当初、夫以外にはHIV感染を打ち明けていなかったの、なかなか情報収集ができませんでした。告知後に『たんぼぼ』を手渡されましたが、精神的に余裕がなく、実際にNPOを利用するまでに1年以上がかかりました。『たんぼぼ』の情報からインターネット検索をし、対面相談をやっている民間支援団体に連絡を入れたさいには、知らない人と話す不安がありましたが、医療やメンタルヘルスにかんする情報などを教えてもらえて、非常に頼りになりました。

感染のきっかけになった相手をうらむ気持ちはまったくないし、気にしていたらきりがなくとも思っています。でも、何をする時にも自分がHIVであることが頭に浮かんでしまいます。他の感染者のなかには、告知後も体調がよく、HIV感染のことを忘れていられる人もいるのしょうけれど。ブログなどで自分の意見を書ける人は、安定していて強い人だろうと思います。でも、自分自身はそういう「前向き」に嫌悪感を覚えるタイプ。夫とHIVのことを話す時にも、誰かに聞かれているんじゃないか、誰かに病院や社会福祉事務所からの書類を見られるんじゃないかと、たえず気にしてしまいます。以前、社会福祉事務所に出かけた時に、担当者が他の職員に耳打ちをして、私のほうを見られたことがあるんです。あとから、耳打ちされた職員が新しい担当者であるとわかったんですが、そういう態度はとても嫌です。

## 仕事について

大学卒業後、小規模の会社に就職しました。社長は厳しい人でした。採用されてすぐに店長を命じられ、持ち前の責任感から必死で働きました。それまでの私は、家族のなかでも、自分だけが“うだつのあからない子”だと感じて生きてきたんです。だからこそ、がんばらなくちゃと思いました。でも、仕事でいくらがんばっても認めってもらえないという思いがあって、その反動で夜遊びにハマっていきました。すぐに男性を好きになり、性交渉を重ねました。HIV感染をしたのは、この時期なんじゃないかなと思います。

30代後半で結婚したのを機に、同じ会社内で正社員からアルバイトに変えてもらいました。その後、HIV陽性がわかった時点でしばらく休みをとることに決め、そのまま仕事は辞めました。当時、CD4値が4で、1日1時間歩くのがやっとという体調だったんです。それなのに医師からは、私の体調や仕事

内容について確認もせずに、「仕事はできる、大丈夫」と安易に就労を勧められました。自分の具合の悪さをわかってもらえていないことは不満でした。

その約1年後、体調も回復してきたので、勤めていた会社にアルバイトとして復帰し、現在に至っています。

自分の寿命も短くていいと思ってしまい、働き続けることについてのハードルも高いと感じているのが正直なところです。

## ことば

**肺炎** ニューモシスチス(カリニ)肺炎は、HIV感染による日和見感染症の一つ。このほか、免疫が下がることによる帯状疱疹や神経痛などが発症することも多い。

『たんぼぼ』 HIV陽性告知を受けたばかりの人向けの冊子。医学的な基礎知識、福祉制度、社会生活、プライバシー、HIV陽性者の性生活についてなど幅広く紹介している。編集発行:東京都福祉保健局、制作協力:民間支援団体、2009年3月発行。現在、ウェブ上でもpdfファイル公開されている。

## 支援のためのポイント


HIV感染がわかってすぐに夫にメールでカミングアウトをし、「大丈夫だよ」という返信をもらえたリエコさんですが、一緒に暮らしているからこそ言えないつらさや不満があるようです。また、体調不良により休職を考えたさいも、医師から「大丈夫」と就労を勧められたことについても、彼女は不満を感じています。

支援においては、たんに周囲にカミングアウトを受け入れてもらったか、就労しているかどうかだけでなく、本人がどのように感じているか、時にアンビバレントな(いい面と悪い面それぞれの)気持ちについて、よく聴

くことが求められます。リエコさんがポジティブな自己像や将来像を持って苦しんでいる背景には、幼少期からの親子関係や、これまでの満たされない気持ちがありそうです。就職後は、仕事でがんばりながらも自分が認められない不安から、恋愛やセックスを繰り返し、恋愛依存・セックス依存といえる状態になってしまったようです。

NPOに連絡を取ったのは、夫がHIVと向き合っていないことを補完するためでもありました。そこで情報を得たり、違う見方を知ることで、視野に広がりを持たせること

ができました。また、家族との関係、医療との関係、地域の新しい支援ネットワークをより強くすることで、社会復帰への後ろ盾を得たようです。

就労	<b>社会保険を利用することで、病気が 会社に知られてしまうのではないかと不安</b>
	HIVを告げたところ退職を強要、アルバイト勤務
10	
 ジュンさん 40代/男性 2001年頃告知	—(PROFILE)— 40代のジュンさんは、これまで肉体を使う仕事であったため、服薬の開始時などは調整に戸惑うこともあったようです。そうした背景から、転職を繰り返しながら、現在はアルバイトとして勤務しています。
keyword	転職 退職願いの要求 社会保険 アルバイト勤務

## 事例の概要

HIV陽性について、きょうだいや周囲の人には告げているジュンさん。複数回の転職経験があります。

以前に勤めていた職場では、身体的な負担が大きい勤務であったため、体調を崩していました。欠勤の理由を尋ねられたさい、HIV感染のことを伝え、上司から退職願を出すことを求められました。ジュンさんは、会社に迷惑をかけていると感じて、それに応じました。

就職にあたっては、通院時間を確保すること、医療費の支払いに会社の社会保険を利用することの不安があり、あえて正社員ではなくアルバイトでの雇用を選んでいます。残業代が出ないのが難点と感じながらも、時給での給与支給を望んでいます。

## 感染を知った頃

6、7年前に告知を受けました。それ以前に保健所でHIV抗体検査を受けた時には陰性だったのですが、「ちょっと危ないかな」と思って、再度受検した時でした。体調もよく、仕事や日常生活の面でも問題は感じていませんでした。

民間支援団体を通じて知り合った人たちには、感染者同士でもあるためHIV感染の事実を話すことができます。ほかには、きょうだいと友だちの一部に話しました。きょうだいには、今後、服薬を開始したりエイズ発症をしたりした時のことを考えて、感染経路については触れずに、HIV感染の事実だけを伝えました。皆、打ち明けたあとも、自分との付き合い方を変えたりはしませんでした。

当初は4か月に一度、通院し、免疫状態を検査していました。仕事の勤務時間の都合に合わせて、診療時間の異なる病院へ2回転院しています。

## 仕事について

これまで何度も転職をしています。景気や経営状態、上司との関係など、病気とは関係がない理由での転職経験もあります。HIV感染に関連した転職の理由としては、告知直後に受けた手術のあとにリハビリが必要な状態となり、業務に支障をきたしたことです。また、長期的な休みがとれない職場だったので、その後、リハビリを受けながらも勤務可能な業種へ転職しようとしたのがきっかけです。

仕事を辞めたあと、経済的にゼロにならないように、とにかく退職後は次の仕事を探すというパターンを繰り返してきました。

現在の職場の前に勤めていた会社は、朝早くから夜遅くまでの勤務で、身体的にも負担が大きい仕事でした。そのため急激にCD4値が下がってしまい、服薬を開始することになりました。倦怠感が強く、やる気も出せない状態で2日ばかり仕事を休んだところ、上司から理由を尋ねられました。ちょうど

CD4値が下がり、自分でもエイズ発症のことが頭にあったこともあり、感染の事実を伝えました。すると、すぐに上司が自宅に来て、「退職願を出してほしい」と言ってきたんです。おそらく他の上司とも話し合いをした結果だったのだらうと思います。HIVについては、上司は「知ってるよ。血液の病気だろう」と言い、就職時の診断書には記載されていなかったことを指摘してきました。じつは採用に不利になると思ったので、それについては書かずに提出していたんです。

自分としては、会社に迷惑をかけないように正直に話しただけだったのですが、会社にとっては私を雇用し続けることのメリットがないと判断したのでしょう。その会社は、試用期間もなく、収入もよくて、非常に条件がよかったです。ハードワークだったため、服薬開始後の勤務はきつかったです。会社側は、私がまだ就職して間もなかったために、たんに慣れていないと見なしていたようです。

上司から退職を迫られた時には、「そういう目で見られたのだな」と感じたのと同時に、「実際に休んでいるのは事実だし、迷惑をかけてしまっている」とも思いました。それで、その場で退職願を書いたんです。内心、その時の状態では長く働けないとも思っていたので、しょうがないというような気持ちだったんですね。私自身、仕事にたいして、経験がないとできない業種だというプロ意識もあり、十分に働けないまま会社に居続けるのは甘えであるという考えがあったんです。

その後、2か月ほど就職活動を行いませんでした。前職と同じ業種で探しながらも、通院が可能で、身体的な負担が少ない職場を探しました。HIVの治療のほか、同じ病院内の精神科も受診しているので、通院時間はどうしても確保しなければなりません。また、正社員として採用されると社会保険になり、医療費のことから病気が会社に知られてしまうのではないかと不安だったので、アルバイトでの雇用を選びました。

## 支援のためのポイント

転職を繰り返しながら、収入が途切れないうような働き方をする人もいます。ジュンさんの場合、転職のきっかけとしては、会社の経営状態や人間関係などのほか、HIV陽性にかかわる理由もありました。

ジュンさんのように体力を要する職種である場合には、体調不良や服薬導入時の体調の変調が表面化しやすいという特徴があります。そうしたなか、体調不良の原因としてHIV感染の事実を上司に伝えたところ、退職届を出すことを強要されたジュンさん。障害を理由とする解雇は不当なものです。彼は採用時に提出した書類に

HIVのことを書かなかった後ろめたさや、欠勤にたいする罪悪感から、上司の要求に応じてしまいました。彼の場合、自らの「プロ意識」が、自分自身を追い詰めてしまったところもありそうです。仕事の継続にかかわる相談においては、就労にたいしてどのような意識を持っているか、会社にたいしてどのような気持ちでいるのかなど、心理的な状況についても確認しながらすすめることが求められます。

社会保険を使って医療費を支払うことについて、会社に病名が知られてしまうことを不安に感じるHIV陽性者は少なくあり

ません。社会制度についての十分な情報提供が欠かせませんが、もちろん会社側も社員の個人情報やプライバシーが守られるような体制をつくらなければなりません。

非正規社員の場合、時間的な自由がきく点がメリットとしてあげられますが、年齢によって採用の機会が制限されたり各種保障が少ないというデメリットもあります。体調やライフスタイル、将来的な計画などにかんがみながら、就労形態を検討していくことが望まれます。

就労	障害者枠での面接のさい、
	「前例がない」と言われショックでした
11	体調不良で契約社員を解雇、障害者枠で就労活動中
	アツシさん 30代/男性 2004年告知
keyword	エイズ発症 契約社員 就職活動 障害者枠

## —(PROFILE)

30代のアツシさんは、体調不良をきっかけとする辞職や転職を複数回繰り返しています。仕事にたいしては前向きで、意欲を持ちながらも、障害者枠での採用が難しい現状にたいし、不満を感じています。

## 事例の概要

アツシさんがHIV陽性の結果を知ったのは、エイズを発症した状態でのことでした。医療従事者の勧めで、病気とセクシュアリティのことを、きょうだいと親に伝えました。

HIV告知を受けた頃、勤務していた貿易会社が業績不振を理由に依願退職者を募り、辞職をしました。転職した団体は業務の負担が大きく、身が持たないと感じたアツシさんは退職し、他の企業に転職しました。ところが、体調を崩したことや服薬の副作用により十分な勤務ができなくなり、人事担当者にHIV陽性のことを打ち明けました。人事担当者の計らいで、正社員から契約社員に変え、在宅で働けるようになったものの、会社の業績不振により契約が解除されてしまいます。会社へ迷惑をかけていると感じたアツシさんは、辞職することに決めました。

新たに正社員として採用されたものの、また辞職に至ることを恐れて、HIVについては話さずにいます。障害者枠での採用に関心を持っていますが、面接時に理解のない発言を向けられることもあると言います。

## 感染を知った頃

2004年、原因不明の発熱で寝込み、HIV抗体検査をしたところ陽性と判明しました。病院を移転し、そのまま3か月間入院。**サイトメガロウイルス感染症**で、いきなりエイズ発症をした状態でした。

以前からHIV抗体検査はしていたのですが、それまでの結果は陰性でした。最後に検査してからしばらく間があいていたものの、病院から検査を勧められた時には抵抗なく受けました。

結果を聞いた時には、高熱で朦朧としていたせいでもあったかもしれないけれど、「ああ、そうですか」という程度でした。医療従事者から「親にも伝えたい」と言われたので、ゲイであることも一緒にカミングアウトをしました。親にとっては青天の霹靂だっただろうと思います。事前にきょうだいに相談したところ、同性愛に理解があり、親へ伝えるさいにもサポートをしてくれました。

退院後、親との距離の取り方を考え、ちょうど友人が部屋を借りたのを機に、その一部屋を借りることにして実家を出ました。現在も実家を離れて生活しながら、たまに実家に帰っています。

## 仕事について

大学卒業後、いわゆる就職氷河期に最初の就職をしました。HIV感染がわかったのも、この時に就職をした貿易会社に勤めている時でした。退院後、会社が業績不振のため依願退職者を募り始めたので、退職を決めました。当時は、あまり体調のことは心配していませんでしたが、以前から辞めたいと思っていたので渡りに舟でした。

留学関係の非営利団体へ再就職し、海外留学の希望者へのカウンセリング業務に携わりました。約1年間勤務し、体調の面では問題ありませんでしたが、業務の負担が大きく、身が持たないと思って退職しました。

その後、最初に勤務していた貿易会社の取引先からの紹介で、外国にベースのある国内企業に転職しました。転職後の1年間は体調もよかったのですが、次第に体調を崩しやすくなりました。CD4値も100～200から上がらず、服薬の副作用もあって倦怠感などに悩まされました。

十分に働けず、会社にたいして申し訳がないという気持ちがあったので、社長から体調不良の理由を問い詰められた時に、打ち明けようと思いました。話さないとうにもならない状況だったんです。そこで、まず人事担当者に話し、「社長には話してほしくないが……」と希望を伝えながら、HIVのことを打ち明けました。あとはもう、その人事担当者に任せることにしたんです。その後、人事担当者の計らいによって、いったん正社員から契約社員へ変えてはどうかと勧められました。契約社員になってからは、週に1～2日間出勤し、あとは在宅で仕事をするようになりました。しかし、会社の業績不振によって契約解除の通達を受けたため、辞職しました。「すでに十分迷惑をかけている」という気持ちが強かったからです。

派遣社員のほうが採用が早いと考え、3か月間の派遣契約で新たな就職先を得ました。1か月半、その会社で働いた時点で正社員になりました。でも、体調を崩しがちなので、また以前のように辞職に至ることになるのではないかと不安でした。ですから、職場には疾患のことは話しませんでした。持病を理由に1、2か月に一度、通院をしますが、職場に疾患のことが知られたらどんな反応が来るか……。悪いほうに変わるとも思えないけれど、気後れます。

民間支援団体に来たのは、障害者枠での雇用について考えていた時です。以前、体調不良で仕事を休みがちになった時に、社長に理由を問い詰められたことがあり、疾患を隠し続けるのはストレスだと感じていたからです。障害者枠雇用のうち免疫障害の雇用もあると聞いて関心を持ちました。

でも、実際には就職面接のさい、「前例がない」とか「他の社員がどう思うかが懸案」などと言われてしまうこともありました。書類審査を通しておきながら、面接時にその対応はないんじゃないか、と不満を持ちました。また、面接に行ったにもかかわらず、「書類選考で落としました」と告げられたこともあり、非常にショックでした。しばらく障害者枠での就職活動をやめていたこともありますが、外資系企業からコンタクトがあり、採用について調整してもらっているところでした。

働かないでいると、気分的にも落ち込んでしまいます。CD4の値が思うように上がらない時はなおさらです。将来のことばかり考えると立ちすくんで動けなくなってしまうので、できるだけ考えないようにしています。

小学校高学年でゲイの自覚を持ってから、どこにも相談できずに、自分だけであれこれ考えながら生きてきました。だから、今後のことも自分自身で決着地点を見つけるしかないと思っています。

## ことば

**サイトメガロウイルス感染症** 日和見感染症の一つ。サイトメガロウイルスにより肺炎や髄膜炎を引き起こされる。

## 支援のためのポイント


アツシさんのようにエイズを発症した状態でHIV感染を知る場合、身体的・心理的・経済的状況の準備性が整わないまま、告知を受け止めたり、その後の生活について検討しなければならぬという負担が生じがちです。カミングアウトのさいに本人の同意や納得があったか、またカミングアウトをされた人がどのように受け止めたかなどについて、配慮しながら支援する必要があります。

エイズへの治療をしながら働くことは、身体的な負荷も大きく、それによって就労の継続が困難になることもあります。体調

に合わせた働き方や業務内容を検討することが大切ですが、HIVについて会社に知らせずに働く場合は、とりわけ就労の調整をすることが難しいこともあります。

アツシさんの場合、以前、勤務していた会社では、人事担当者の方にHIV陽性を打ち明け、相談をしています。正社員から契約社員の雇用に切り替えることで、勤務時間や就労形態は改善されたものの、会社の業績によって契約更新が難しくなっていました。契約社員の場合、就労継続の保障が十分ではないことが問題になることもあります。

障害者枠での採用を望むようになったアツシさんですが、かならずしも雇用側の意識や体制などの準備性が十分ではない場合もあります。面接での不適切な質問や消極的な採用過程は、HIV陽性者にとって負担になります。

就労	転職をするなら、ありのままの
	自分を受け入れてほしい
12	障害者枠での採用を希望して就職活動中
	<p><b>タイチさん</b> 30代/男性 2003年告知</p> <p>——(PROFILE)</p> <p>30代のタイチさんは、物静かな雰囲気男性ですが、障害者枠での採用を目指して意欲的に就職活動をしています。しかし、就職活動は思うように進まず、すでに200社近くに応募しているものの、結果は厳しいようです。</p>
keyword	食品製造業 障害者枠 就職活動

事例の概要

食品製造業で働くタイチさんの仕事内容は、デスクワークと製造現場を行き来するものです。仕事を休むとすぐにボーナスの査定に影響してしまいますが、月に1度、休みをとって通院をしています。

地方であるという地域性や、障害者の雇用の前例がないこと、また食品製造業という業種から、HIVにたいしてはまだ強い偏見があるとタイチさんは感じています。そのため、彼はHIV陽性について隠しながら働くことに決めましたが、体調不良の理由を説明できなかったり、周囲を騙しているような気がしたりして、打ち明けないことに負担を感じていると言います。

そこで、障害者枠での採用で転職しようと考えたタイチさん。積極的に就職活動をして、なかなか面接にこぎつけられないうえ、面接ではHIVに理解のない質問を向けられることもしばしばあるとのこと。それでも、自分のために、また他のHIV陽性者のためにも、HIV陽性であることを隠さずに働きたいとタイチさんは望んでいます。

感染を知った頃

2003年に、鼠径ヘルニアのための術前検査として受けたHIV検査で、陽性とわかりました。主治医から自宅に電話があり、感染を告げられたあと、「うちでは診られないから、別の病院に行ってください」と言われました。

告知を受けて「やっぱり……」という気持ちはありました。ゲイである以上、STD(性感染症)から離れられないと思っていたからです。「やっぱり」という思いの反面、「電話で言うのかよ」という不満の気持ちもありました。

仕事について

勤務先には、HIV感染については伝えませんでした。医師に「肝機能障害」という診断書を書いてもらい、職場に提出しました。

検査のため月1回、半日かけて通院しています。毎月、平日に仕事を休まなければならないので、その理由として診断書を出したわけです。会社からは、通院についてはとくに何も言われていません。

現在の仕事は製造業です。デスクワークと製造現場での勤務の両方があります。1日休むだけでもボーナスの査定に反映されてしまうので、月に1回休み影響は大きいのですが、ボーナスはオマケのようなものだと思っているので、しょうがないと思っています。

障害のことは、周囲にあまり隠さずに話したいとは思っています。でも、田舎だとHIVにはまだ偏見がありますからね。障害者を雇用したことのない企業も多いし、「HIV=アブナイ」というイメージも強いと思います。休憩時間にHIVにかんするニュースが流れると「ええー?」というような反応があったりします。だから、もし会社に自分がHIVであることを伝えたら、もう会社にはいられなくなるだろうな。食品製造という業種柄、イメージ的にもよくないと思うから。

でも、障害を隠しているのも大変です。まず、ウソをついて

通院しなくちゃならない。HIVに感染してから風邪を引きやすくなったけれど、原因を言えない。騙しながら仕事をしている気がしてしまうんです。周囲も自分自身も……。隠さずすべてオープンにして仕事をしたいとは思いますが、まだまだ社会には「HIV=悪人」というイメージがあるんじゃないかな。打ち明けたところで、周囲から気持ち悪がられて終わりだと思います。

だから、僕は会社でカミングアウトをしようとしたことはありません。それならば、最初から自己開示をして働けたほうがいいかなって。それで、転職を考えたわけです。

転職にあたって、まず、民間の就職斡旋会社に登録をしました。最初から障害者枠での採用を狙いました。障害者手帳をコピーして送りましたが、書類審査で落ちてしまい、面接までなかなか行けません。面接までこぎつけられるのは10社に1社程度の割合です。もしかしたら、会社側にとっては、内部障害者を雇っても会社のアピール性が乏しいと考えているのかもしれない。

面接では、失礼なことを聞いてくる企業もあります。「どうして感染したのですか?」とか、「性感染なの? 血友病なの?」とか。正直に「性感染です」と答えると、「やっぱり?」と半笑いされるといった態度をとられたこともあります。

CD4の値を聞いてくる会社もありましたが、HIVの知識がある会社はまだ少ないように感じます。10社のうち1社程度かな。「免疫障害とは何ですか?」と聞かれた時には、「HIV感染者です」と答えています。わかりやすいから。

この2年半で184社に書類を送って、面接に至ったのは12社。面接を受けられたのは、外資系や製薬会社など雇用実績のある企業が多いです。HIV陽性者を雇用していることを公表している会社も数社あります。「薬を飲めば大丈夫だね」と言ってもらいました。

障害者枠での就職に挑み続けているのは、HIV陽性者

支援のためのポイント

HIV陽性者が就労を続けるうえで、HIV陽性について職場に伝えるかどうかは、悩みの一つです。

タイチさんははじめのうち「周囲にあまり隠さずに話したい」という思いを持ちながらも、職場の人びとのHIVにたいするイメージや偏見を感じて、打ち明けずに働くことを選びました。あからさまな差別やいやがらせがなくとも、タイチさんが体験したような休憩中のやりとり(HIVにかんするニュースが流れた時の周囲の反応など)によって、HIVへの偏見を感じ取ることは、少なくありません。また、職場にはHIV陽性のことをカミング

アウトしないと決めたとしても、秘密を抱えて働くことが、精神的にも状況的にも難しくなることがあります。タイチさんも、自身自身や周囲を「騙している」かのような精神的負担を感じたり、体調不良について説明できずにバツの悪い思いをしたりしています。

障害者枠での採用を求めて就職活動中のタイチさんですが、面接時に不快な質問が投げかけられることもあったと言います。HIVにたいする理解が乏しいことや、HIV陽性者や障害者の雇用の経験が少ないことが、不適切な対応につながること

もあるようです。今後、人事担当者への教育啓発や、障害者枠での採用を進めている会社の経験の共有を進めていくことで、HIV陽性者が働きやすい環境をつくっていくことが望まれます。

また、HIV陽性者の就労支援として、障害者雇用の斡旋業者や説明会、就職関連イベントの情報などが一元化されて提供されたり、履歴書の書き方や面接の受け方といった、具体的なスキルを身につけるようなセミナーなどを望む声もあります。




## 薬物・ 法律問題を伴う 事例

薬物・法律1 怒鳴られながら脅されて、  
精神的にもまいってしまいました  
賠償金請求のトラブルを、職場の上司と弁護士の  
サポートで解決  
【カズさん／30代男性／2006年告知】

薬物・法律2 現実と向き合いながら、  
日々の生活を送っています  
HIV感染判明後、薬物依存に  
【マサルさん／40代男性／2000年告知】

薬物・法律3 一緒にやめている仲間がいるから、  
薬には手を出していません  
覚せい剤の使用から、ピアサポートによる回復へ  
【ハヤトさん／40代男性／2006年告知】

法律 薬物	<b>怒鳴られながら脅されて、 精神的にもまいってしまいました</b>
	1 賠償金請求のトラブルを、職場の上司と弁護士のサポートで解決
	カズさん 30代/男性 2006年告知
—(PROFILE)—	30代のカズさんは、正社員として勤務しています。HIV感染を理由に脅迫をされ、賠償金を支払うよう要求されるなどの被害に遭いましたが、弁護士や上司の助言を受けることができ、今はパートナーにも支えられています。
keyword	カミングアウト 恐喝 賠償金 弁護士のサポート

## 事例の概要

体調不良による通院中、医師の勧めでHIV抗体検査を受けたカズさん。軽い気持ちで受けた検査だったため、思いがけない陽性の結果にショックを受け、すぐにこれまでに性的関係を持った人たちにHIV陽性の結果を伝えました。カズさんとしては、早く検査を受けてもらい、予防行動をとってもらいたいと考えたからです。

多くの人がHIV陰性であったことを報告してくれましたが、乱交パーティで知り合った人に呼び出され、賠償金の支払いを要求されてしまいます。脅されて、示談書にサインをさせられたうえ、お金も支払わざるを得ませんでした。その後、弁護士に相談し、具体的な対処について助言をもらうことができました。

## 感染を知った頃

2006年に告知を受けました。その2、3か月前から体調を崩し、1週間、仕事を休んでいました。ダルくて力が入らない状態でした。肝臓の機能が落ちているという検査結果で、原因は不明のまま通院を続けていました。担当医に「試しに」と、HIV即日検査を勧められました。ちょうど自分でも、保健所で検査を予約していたところでした。軽い気持ちで受けた検査でしたが、陽性の結果を告げられました。保健所で受けた検査の結果も同様でした。

HIVには治療薬があると聞いていたものの、確定検査の結果を知るまではすぐわからなかったですね。「この先、どうなるかわからない」という思いがあって、すぐに直近の上司に相談をしました。上司は心配をしてくれて、他言もせず、確定検査のさいも付き添ってくれました。友人にも相談できたり、すぐ恵まれていたと思います。

告知のさいに保健所で複数の拠点病院を紹介してもらったので、生活や仕事での利便性の高い病院を選び、紹介状を書いてもらいました

## カミングアウト

結果を受けてすぐに、これまでに性的関係を持った人たちに伝えなければと思いました。検査を受けてもらい、予防行動をとってもらわないと、二次三次の被害を生んでしまうと思ったからです。数か月間かけて、関係のあった人たちに伝えていきました。聞いた人の反応は、驚いたり、不安がったり、さまざまでしたが、自分としてはとにかく検査を受けてもらわなければ、という一念でした。もし、誰かに感染させてしまった場合、どう補償をしなければいけないのかが一番心配でした。その頃、あちこちの電話相談や民間支援団体の対面相談を受けました。不安を口にするとストレスも少しは和らいだので。

幸いにも、伝えた相手のHIV検査の結果はほとんど陰性でした。ところが、一人だけ「相談がある」と連絡があったん

です。感染前に“乱交パーティ”で会った相手でした。その日に限って、 Condom は使わずにセックスをしたんです。呼び出されて待ち合わせ場所に行く、本人ともう一人、知らない人がいて、何者であるかも名乗らずに賠償金を請求してきました。

一度は断ったものの、数日後にふたたび、「本人やパートナーも怒っている」「弁護士を立てている」「警察に行く」などと、数時間も怒鳴られながら脅されて、精神的にまいってしまったところで、賠償金を支払う約束をさせられました。さらに数日後、示談書にサインをさせられました。サインをすべきか迷ったものの、感染させたことが公になるのを恐れて、応じざるを得なかったんです。

当時は、法律の知識がまったくなかったので、困り果てて上司に相談しました。相手の脅迫がひどくなり、どうしようもなくなってしまったんです。トラブルのきっかけになったパーティのことや自分のセクシュアリティのことを打ち明けたところ、上司は理解をしてくれ、示談に応じるべきではないと助言してくれました。でも、すでにサインをしてしまったことが不安で、弁護士にも相談をしました。具体的な対処について助言をもらったので、相手から再度、賠償金を要求された時にも、弁護士に相談をしながら相手と交渉することができました。弁護士には、示談にかんして5万円、その後に起こした民事訴訟と刑事告発の手続きで、各10万円を支払いました。

他者へ感染させてしまったかもしれないと心配した自分の気持ちを逆手にとられて、恐喝をしてきた相手の行動は反社会的なものだと思ったので、警察に被害届を出しました。警察からセクシュアリティやパーティの内容の詳細を聞かれたのが苦痛でしたが、その1年後、相手が逮捕されました。民事裁判では、こちらからの損害賠償が認められたものの、まだ支払われてはいないし、最初に脅迫されて支払われた

10万円も返ってきていません……。

このできごとによって、生活には大きな影響を被りました。訴えたことを逆恨みされるという不安がないとは言えませんが、自分が正しいと思う気持ちは変わりません。でも、弁護士や友人、上司、民間支援団体のスタッフに支えられたと思います。事情を打ち明けた恋人にも支えてもらえて、一人ではないと感じることができました。

## 支援のためのポイント

HIV陽性告知を受けたカズさんは、これまで性的な関係を持った人たちに、自分の検査結果を伝え、検査を受けることを促しました。日本では、性的な関係があった相手に告知をする義務があるわけではありませんが、感染が広がることを懸念してとった行動でした。善意にもとづく行動でしたが、このことがきっかけになって、恐喝被害にあってしまいました。恐怖感や無力感、また自分の感染が公になることへの不安から、示談や賠償金の支払いに応じずしてしまいます。こうした被害は、周囲へのカミングアウトにともなう深刻なトラブルといえます。

カズさんは、弁護士や上司に相談をして、対応することができました。法律にかんする情報はまだ身近なものではなく、類似のトラブルが起きた場合、どうしていいかわからないという人は少なくないと思われます。法的な手続きがとれた場合も、相手からの逆恨みにたいする不安や周囲への不信感など、さまざまな影響が残ることも考えられます。カズさんは、NPOスタッフやパートナーのサポートを得るなかで「一人ではない」と感じられるようになりました。被害やトラブルにあった人が孤立し、孤独感を募らせないようなサポートが大切です。

法律 薬物	現実と向き合いながら、 日々の生活を送っています
	HIV感染判明後、薬物依存に
2	
マサルさん 40代／男性 2000年告知	——(PROFILE)—— 40代のマサルさんは、薬物依存から回復すべく、日々を過ごしています。充実した生活を望みながらも、心のどこかで「また心に隙ができてしまうのではないか……」と不安を感じてしまうと言います。
keyword	薬物 依存からの回復 グループ

## 事例の概要

急性肝炎での入院時に受けたHIV検査で陽性とわかったマサルさん。セックスでは相手に合わせてしまうタイプで、自分からコンドームを使うことはなかったようです。感染がわかった時には、すでにエイズを発症していました。

HIV感染がわかってから数年がたち、派遣社員として仕事を始めたマサルさんですが、規則正しい生活を送ることで、かえって夜の時間をもてあますようになったと言います。バーに入りながらセックスを繰り返すなかで、脱法ドラッグを勧められ、やがて覚せい剤にも手を出すようになりました。覚せい剤の影響で、仕事や人間関係を失い、ついに逮捕されるに至りました。

逮捕をきっかけに、今は薬物依存からの回復のための取り組みを行なっています。

## HIV感染を知った時

急性肝炎で入院した時に、感染症科の担当医の説明を受けて、HIV検査を受けました。そこで、HIV陽性とわかったんです。2000年のことです。

10代の頃から男性と性交渉を持つようになり、ハッテン場でのセックスや複数でのセックスをしていました。周囲にHIV陽性者はいましたが、自分にとって身近な問題だとはまったく感じていませんでした。

セックスをする時は相手の求めに合わせるほうだったので、相手にはこと欠きませんでした。10代の時はウリ専もやっています。今思えば、時間をもてあましていたのかもしれませんが。将来の夢なんてなかったから、10年先のことより目先の快樂の

ほうが重要だと感じていました。その頃の自分は、長生きして醜くなるのがイヤでたまりませんでした。

HIV感染がわかったのは30代の時。当時、HIVは死ぬ病気、あるいは薬を飲み続けなくてはならないというイメージがありました。「醜く死ぬのはイヤだ」と思って、すぐにHIVの治療を始めました。すでに日和見感染症であるカポジ肉腫を発症しており、エイズと診断され、障害者認定2級を受けました。服薬の副作用に苦しんだこともありましたが、覚せい剤を使用するまでの5年間は通院と服薬を続けていました。

HIVの感染がわかってからしばらくは、他の人へ感染させる心配や、誰から感染したのかわからないことが怖くて、セックスをせずにいました。肉腫が体のあちこちにあって、抗HIV薬の副作用で体調不良だったせいもあります。カポジ肉腫によりガン保険が適用されたので、保険金で生活しました。

その後、派遣社員として勤務を始めると、夜の時間をもてあますようになってバーに出入りし、ふたたび多数とセックスをするようになりました。コンドームを使うかどうかは相手に合わせていたので、相手がナマでやろうとすれば、自分もコンドームを使わずにセックスをしていました。その時の相手がHIVに感染したかどうかはわかりません。HIV感染がわかってから約2年がたった頃で、病気にたいする恐怖心も薄らいでいました。

## 薬物について

知り合いからゴメオをもらい、興味本位で使い始め、次第に常用するようになりました。ドラッグを使うと自制がききづらくなり、ますます使用するようになってしまったのです。

その後、ゴメオが非合法になり、入手ルートを考えていた時、セックスの相手から覚せい剤を勧められて使用しました。そのうち毎日使用するようになり、用量も増加。まとめ買いをしたり、暴力団から直接購入したりするようになりました。安価で入手したクスリを市場価格で売り、売上金でまたクスリを買ったり……。掲示板やチャットなどを通じて覚せい剤使用者と知

り合い、ほしがっている人に転売するようになりました。

覚せい剤の影響で、次第に会社への出勤も不規則になりました。クスリのコントロールができなくなり、セックスの時だけではなく、日常生活でも眠気覚ましに覚せい剤を使うようになっていたのです。そのせいで仕事で大きな損失を出したり、同僚にたいして被害妄想を抱いたりするようになり、ついに職場に行けなくなってしまいました。体重も10kg以上激減し、同居していたパートナーにクスリの使用を疑われたのを機に、家を出ました。そして、覚せい剤を転売しながら放浪生活を続けたのです。

そんななかで誕生日を迎えました。覚せい剤を仕入れたものの、行き場が見つからずハッテン場へ向かう途中のことでした。むなしさを感じながらフラフラになって歩いていたら、警察官に職務質問をされたのです。警察官を見た時、「ヤバイかな」という気持ちの一方で、「見つかったら(覚せい剤を)やめられるかな」という期待があったのも事実です。仕入れたばかりの大量の覚せい剤が見つかり、逮捕されました。

## ことば

**急性肝炎** B型肝炎。性行為による感染も多い。

**ハッテン場** おもに性行為の相手を求めるために同性愛者が集まる場所の通称。サウナやホテルなどの店や、公園などのスポット。

**ウリ専** 性行為をして金銭を受け取る。バーで客の接待をしなが指名を待つ方式や、専門の営業主に登録し店舗備え付けのリストやウェブサイトによる客の指名によって派遣される方式などがある。

**日和見感染症** HIVに感染し免疫力が下がることで、通常では発病しづらい感染症を発病するようになる。カンジタ症、ニューモシスチス肺炎、トキソプラズマ脳症、サイトメガロウイルス感染症など。カポジ肉腫もそのひとつ。

**障害者認定** 現在、HIV陽性者は内部障害として1級から4級までの障害者手帳を受け、自立支援医療など福祉施策の対象になっている。

**服薬の副作用** HIV感染症治療は複数の抗HIV薬の服用によりウイルスの増殖を抑え免疫力の回復・維持をはかるが、抗HIV薬には激しい副作用を伴う場合もある。頭痛、めまい、眠気、吐き気、下痢のほか、脂肪分布の異常による体型や容貌の変化など、QOLに直接影響するものもある。

**ゴメオ** 5meo-diptという薬物。比較的安価でネット等で購入でき、服用時の多幸感等からセックスドラッグとして流行した。当時から事故の発生や依存性が問題視されていたが、2005年に麻薬指定され、現在は違法薬物(非合法)である。

**覚せい剤** 薬物(ドラッグ)の一つ。使用により、高い興奮が得られ、一時的な活動力が高まったり、セックスでの強い快感が得られたりするが、幻聴・幻覚・妄想などの精神症状や身体的症状に見舞われる。依存性が高い。

**SNS** ソーシャル・ネットワーク・サービス。インターネット上で、情報交換ができるシステム。関心テーマごとにコミュニティがあり、参加者同士がお互いにコメントを寄せあったり、情報共有をすることができる。

## 支援のためのポイント

現在40代のマサルさんは、若い時からコンドームを使わないセックスを重ねていました。身近にHIV陽性者がいても、なかなか「自分にあること」と感じられないこともあります。また、そうした相手まかせの性行動の根底には、自分にたいする自信のなさや自分への否定的な気持ちなど、心理的な問題もあるかもしれません。

ドラッグや覚せい剤などの薬物使用は、最初はマサルさんのように、ささいなきっか

けから始まることも多いものです。自分で量やタイミングをコントロールできる、と思いつながり、支え合う体験をすることが、回復の過程を進む力になるでしょう。本人のみならず、家族が民間支援団体や医療機関、精神保健福祉センターなどで、家族向けプログラムに参加することも役立ちます。

薬物を使わない日々を送るために、マサルさんは、同じ立場の人のコメントを読んだり、薬物を使いそうな機会を避けたり、努力を続けています。でも、ひとりで取り組むのは、非常に困難な過程です。本人がセルフコントロールを続けていくには、そ

れを支える環境が大切です。同じ立場の仲間とつながり、支え合う体験をすることが、回復の過程を進む力になるでしょう。本人のみならず、家族が民間支援団体や医療機関、精神保健福祉センターなどで、家族向けプログラムに参加することも役立ちます。

法律 薬物	一緒にやめている仲間がいるから、
	薬には手を出していません
3	覚せい剤の使用から、ピアサポートによる回復へ
	<p>ハヤトさん 40代／男性 2006年告知</p> <p>——(PROFILE)——</p> <p>40代のハヤトさんは、薬物依存の問題を抱えています。一人ではやめられず受刑を繰り返したハヤトさんですが、同じ経験を持つ仲間たちのグループにかかわりながら、生活を立て直しているところです。</p>
keyword	セックスドラッグ 覚せい剤 ピアサポート

## 事例の概要

ハヤトさんは、19歳の時にセックスの相手から勧められた薬物を使用することがきっかけで、薬物依存の問題を抱えるようになりました。HIVは自分には関係がない問題と考えていたこともあり、コンドームは使っていませんでした。HIVに感染していることを知ったのは、薬物依存の治療先の医療機関でした。

最初に薬物を使ったのは、彼の意志によるものではありませんでした。しかし、薬物への抵抗感が下がり、さまざまな種類の薬物を使うようになり、やがて覚せい剤を使用するようになりました。コントロールできると感じていたのもつかの間、次第に使用する薬物の量や頻度が増えていき、仕事にも支障をきたすようになってしまいました。覚せい剤所持で逮捕された時には、内心、ホッとした気持ちも感じた、ハヤトさんは言います。

刑務所からの出所後、最初は家族の手前もあって通いはじめたピアグループでしたが、そばにいてくれる仲間やスタッフの存在は、ハヤトさんにとって、薬物を手放して生きるための大きな支えになっています。

## 感染を知った時

HIV感染がわかったのは、2006年です。薬物依存の治療を受けていた病院で検査をして、告知を受けました。

## 薬物の使用

薬物に依存するようになったきっかけは、19歳の時、セックスの相手から勧められたLSDを口にしたことからです。

10代の頃から男性との性交渉を持ち、恋人とのセックスのほかに、ハッテン場でのセックスを繰り返してきました。HIVは自分には関係のない問題と考えていたこともあり、コンドームは使っていませんでした。

初めて薬物を使ったのは、自分の意志ではありませんでした。セックスの相手からガムの包み紙のようなものを渡され、勧められるままに口にしたら、あとからそれがLSDであるとわかったんです。何の説明もなく薬物を使わされたことに腹が立ちましたが、この経験で薬物にたいするハードルが一気に下がりましたね。それからさまざまな種類の薬物を試すようになり、セックスドラッグとして使っていましたが、相手から誘われて使うことが多かったんです。

20代前半でセックスフレンドから覚せい剤を勧められ、最初はためらいもありましたが、何度か誘われるうちに「一回くらいならいいかな」と思って。高校時代に離婚した父親も覚せい剤を使っていたのですが、そのことはあまり思い出すことはありませんでした。

その後、仕事が多忙になったこともあり、数年の間は覚せい剤を使わずにいたのですが、別の相手から誘われたのがきっかけでふたたび使い始めました。毎回、相手から購入するのが申し訳ないような気がして、自分で売人から買うようになりました。覚せい剤を使っている相手を選んでセックスをしていました。でも、その頃は給料やボーナスの額に合わせて覚せい剤の購入量を変えたりして、自分では「コントロールできている」と思っていたんですね。

30代半ばの頃、仕事上や生活上のトラブルが続き、ウサが溜まっていき、セックスの回数とクスリの使用回数が増え、そのうち仕事にも支障が出るようになりました。“楽しみ”のために使っていたクスリが、次第に“支え”に変わってしまったんです。そのうち眠れなくなってしまい、仕事でも遅刻や欠勤が目立つようになってしまいました。

その半年後、路上で警察の職務質問を受け、覚せい剤所持で起訴されました。警察に捕まった時には、内心、ホッとした気持ちも感じていました。自分では気持ちや行動がコントロールできない状態だという自覚があったからです。執行猶予となりましたが、釈放後は喜びよりも憂鬱感を抱いていました。

釈放後は実家に戻ったものの、家族の視線をわずらわしく感じて、以前のセックスフレンドに連絡を取りました。そして、ふたたび覚せい剤を使用してしまったんです。数か月後、職務質問を受けて、覚せい剤所持により再逮捕。今度は2年間の実刑を受けました。そして出所した1年後、またも覚せい剤所持使用で逮捕。3回の逮捕で、計4年間、服役していたことになります。

3度目の逮捕の直前、セックスをした相手からHIV陽性であることを知らされました。刑務所にいる間、自分もHIVに感染したのかどうかは気になっていましたが、あえてHIV抗体検査は望みませんでした。刑務所でHIV陽性が発覚することは、得策だとは思えなかったからです。刑務所では薬物についてのプログラムはなく、治療施設のVTRを見せられたものの、自分には関係がないように感じました。出所後の就労についても、スポーツ新聞の求人欄のコピーを見せられただけで、十分な情報はもらえませんでした。

出所後、実家で暮らしながら短期のアルバイトをしましたが、お金が入るとクスリの購入に使ってしまいました。家族の

手前、クスリをやめるポーズだけでも見せなければと思って、いわば家族サービスのつもりで治療施設に連絡を入れたんです。入寮はせず、リハビリとして通所することから始めました。最初のうちは入寮者たちとケンカ腰でかかわっていたのですが、次第に打ちとけていきました。自分よりひどい依存症の人から「オレも(クスリを)やめられたんだから、きっとやめられるよ」と慰められたり、クスリをやめられた人や再使用してしまった人など、さまざまな人と会ったりするなかで、「クスリは使いたいとは思うけど、使わないほうがいい」と思うようになっていきました。

その後、2006年に薬物依存治療のクリニックでHIV抗体検査を受け、陽性だとわかりました。専門病院で確定診断の結果を聞く前は精神的にしんどくなり、クスリを使ってしまいましたが、今のところ、それが最後のクスリです。クリニックのスタッフが「しんどいね」と言いながらそばにいてくれたことが、大きな支えになりました。ゲイであることや薬物を使っていること、HIVであることなど、すべてをさらけ出して、丸ごと理解された気がしました。「あの人たちを裏切れない」という思いと、「一緒にやめている仲間たちがいるから」という思いがあるから、それ以降、クスリには手を出していません。

## ことば

**薬物依存** 薬物(ドラッグ)の使用により、身体面や精神面に影響をきたした状態。一度の薬物使用であっても、依存性が生じうる。  
**LSD** 薬物の一つ。日本では1970年に麻薬指定されている。  
**ハッテン場** おもに性行為の相手を求めるために同性愛者が集まる場所の通称。サウナやホテルなどの店や、公園などのスポット。

## 支援のためのポイント

薬物使用への入り口として、セックス時に使用する薬物、いわゆるセックスドラッグを使う人は少なくありません。セックスの感度を高める一方で、理性的な判断がききにくくなり、興奮した状況になることで、コンドームを使うことが難しくなりがちです。薬物の使用は、薬物による精神的・身体的な影響をもたらすばかりか、セクシュアルヘルス(性の健康)の面にも、大きな影響を与えるものです。

周囲の人間関係にも影響が及びます。薬物の使用を重ねるうちに、身近な人たちのことも重苦しく感じてしまい、遠ざかって

しまうようになると思います。また、自分のコントロールが失われていくのも、薬物依存の特徴の一つです。ハヤトさんも、次第に薬物を使わずにすることが困難になり、仕事などの日常生活にも支障をきたすようになりました。仕事上のストレスなど、その人を取り巻く環境的な問題も、薬物の使用頻度に影響を与えます。

ハヤトさんは刑務所での薬物教育や支援体制が不十分であることから、自身の問題を打ち明けず、HIV検査も受けようとしませんでした。薬物もHIVも、その後の支援がないのであれば、治療を望んだり、検

査を受けたりすることはできません。

薬物依存からの回復の過程は長く続くものですが、ハヤトさんのように、ピア(当事者)同士の語り合いや支え合いが、大きな力になります。孤立ではなく“つながり”、叱責ではなく“共感”が、薬物依存からの回復を支えるのです。

## Q1

エイズとは、  
そもそもなんですか？

エイズは、英語の **A**cquired **I**mmune **D**eficiency **S**ndromeの頭文字AIDSに由来し、日本語では「後天性免疫不全症候群」と呼びます。HIVというウイルスが体内に入ることによって、さまざまな病原体やがんから身体を守るはずの免疫の働きが機能しにくくなり、さまざまな病気を発症する状態を、エイズといいます。

## Q2

HIVとは  
なんですか？

HIV（ヒト免疫不全ウイルス）というウイルスのこと。このウイルスが私たちの免疫能を担う白血球のなかのリンパ球に感染し、それを破壊し、免疫不全の状態に至らせます。HIVが体内に入った状態をHIV感染（HIV陽性、ポジティブともいう）、またHIV感染によって免疫機能が働かなくなり、さまざまな病気を発症した状態をエイズといいます。

## Q3

HIVは、どのように  
感染するのですか？

HIVがうつる経路は、次の3つです。それぞれHIV感染を予防する方法があります。

**1) セックス**……精液や膣液にHIVが混入していると、それらの体液が尿道、膣、肛門の粘膜につくような性行為をした場合に、感染の可能性があります。感染率は1%以下とも言われていますが、コンドームを使わずに性行為をすることで、感染の可能性が生じます。正しくコンドームを使い、精液や膣液をおたかひの体内に入れないようにすることで、より安全な性行為（セーフセックス）をすることができます。

**2) 血液・体液**……感染者の血液中にはHIVが存在するため、同じ注射器による麻薬の回し打ちや、病院などでの針刺し事故などによってHIV感染が生じる可能性があります。体液のうち、汗や涙、唾液、尿などには、血液が混入していない限りHIVは含まれないため、それらに触ってもHIV感染のリスクはありません。

**3) 母子感染**……出産時に赤ちゃんが産道をとおるさいに、母体から感染することがあり、感染率は20～30%と言われています。母乳からも感染します。しかし、出産前の母親が抗HIV薬を服薬し、出産方法などを調整することで、胎児への感染をほぼ防ぐことが可能になっています。

## Q4

HIVに感染したら、  
いつエイズを  
発症するのですか。

多くの場合、HIV感染をしたからといって、すぐにエイズを発症するわけではありません。感染したHIVが体内で増え、体のなかのヘルパーリンパ球が減少し、免疫機能が低下して病気を発症するまでには、通常、約10年かかると言われていますが、1ないし2年で発症する例もあります。免疫機能の低下によって、指定された23の病状のいずれかを発症した時に、エイズ発症と診断されます。

## Q5

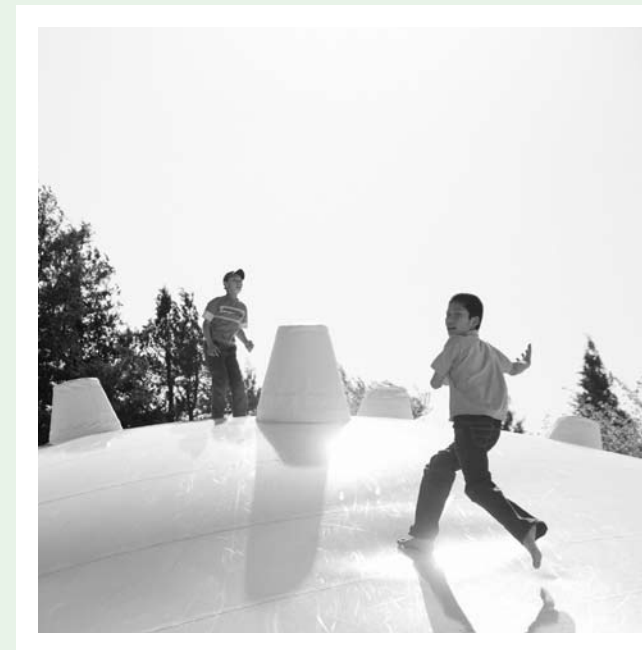
エイズを発症していない  
あいだは、病気では  
ないのでしょうか。

エイズ発症をしていないあいだは、健康的な日常生活を送ることができます。免疫低下によって、病気にかかりやすくなったり、発熱やめまい、カンジタや帯状疱疹などにかかりやすくなることに注意が必要です。健康のためには、早めに自分のHIV感染の状態（ステイタス）について知っておき、医師と相談しながら身体状況にあわせた治療を受けることが望まれます。

## Q6

HIV感染の有無は  
どうやって  
調べるのですか。

HIVに感染しているかどうかは、見ただけではわかりませんし、はっきりとした自覚症状があるわけではありません。血液検査によって、HIV抗体の有無を調べます。検査は保健所での匿名・無料検査のほか、おもな病院で受けることができます（症状がない場合には、健康保険は非適用）。検査後は、通常、約1週間後に結果を聞くことができるほか、当日のうちに結果がわかる迅速検査も普及してきました。





## Q7

### 治療はどのように行なうのですか？

免疫の状態を示すCD4値が一定量を下回ったのを目安として、抗HIV薬の服用を開始します。抗HIV薬とは、HIVの増殖を押さえる薬で、体内のHIVを増やさないことでヘルパーリンパ球の破壊を止め、免疫機能を回復させます。また、エイズを発症しても、ほとんどの日和見感染症は治療を行なうことができます。

## Q8

### 現在、病院や福祉の体制はどうなっていますか？

医療面では、東京の国立国際医療センター内のエイズ治療・研究開発センター（ACC）を中心に全国にエイズ治療拠点病院が指定され、それらをつなぐものとして全国を8ブロックに分けた地域内に、ブロック拠点病院や中核拠点病院が置かれています。福祉面では、HIV感染者は状態に応じて、腎臓透析やオストメイトなど同様の「内部障害」として1級から4級までの障害者手帳が交付され、障害者自立支援医療をはじめさまざまな福祉施策を受けられます。これにより、高額な薬剤費用を全額負担することなく、医療を受けることが可能になりました。

## Q9

### 日本では現在、どのくらいのHIV陽性者がいるのですか？

2008年の新規HIV陽性者の報告数は過去最高である1557名を記録しました。2008年末の累積報告数は1万5451件に及んでいます。10代から70代まで幅広い分布を示しています。この数値はあくまで診断され、報告された数であり、実際はこの数倍のHIV陽性者が存在すると想定されています。

## Q10

### HIV陽性者が仕事をするさいに、気をつけることはありますか？

服薬開始以前の経過観察中や、服薬していても副作用も少なく、体調が安定している人にたいしては、とくに特別な扱いをする必要はありません。服薬等の副作用や通院のさいなどに、職場の配慮があると、さまざまな障害者が働きやすくなります。

## Q11

### HIV陽性者が紙で手を切った時、周囲に感染する可能性はありますか？

紙やナイフ等で手指を切った程度の出血であれば、その血をわざわざ他の人の傷口や粘膜（目、鼻腔・口腔など）に擦り込むことでもしないかぎり、感染は起こりません。原則として、傷の手当ては本人がやるか、他の人が手伝う場合は血液に触れないよう注意します。職場に使い捨て手袋を常備しておくといでしょう。食事のさい、おなじ皿や鍋を用いたり、トイレや浴室、洗濯機を共用するなど、日常生活で感染することはありません。

## Q12

### 日本のHIV陽性者がこれから抱える課題を指摘してください。

HIV陽性者の増加につれ、就労現場でのHIV陽性者への対応にもなう問題が顕在化してきています。従業員のなかにHIV陽性者がいること、HIV陽性者を雇用し職場に受け入れることは、けっしてめずらしい事態ではなくなりつつあります。また、HIV感染に至る背景にはさまざまな要因があり、HIV陽性者はたんに医療面にとどまらないさまざまな問題に直面していることが指摘されています。さきあげた就労問題のほか、うつや依存症（薬物、セックスなど）などメンタル面の問題にも関心が注がれ、支援者間の連携が始まっています。さらに、HIV感染症が一種の慢性病となるなかで患者の高齢化が進み、一般病院での受診や高齢者施設、療養施設での感染者対応・受け入れの問題も重要になっています。





# 15人の語り で学ぶ HIV陽性者と 地域生活

事例から支援を考える

発行日 2009年3月31日

発行 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業  
地域におけるHIV陽性等支援のための研究班  
生島嗣(特定非営利活動法人ふれいす東京)

事例収集・テキスト 生島嗣、野坂祐子

編集 永易至文

デザイン・組版 加納啓善

写真 本多晃

## 連絡先

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス204  
特定非営利活動法人ふれいす東京内  
地域におけるHIV陽性等支援のための研究班・事務局  
TEL:03-3361-8964(平日12~19時) FAX:03-3361-8835  
MAIL:kenkyu.jimu@gmail.com

## ホームページ

地域におけるHIV陽性等支援のためのウェブサイト  
<http://www.chiiki-shien.jp/>

# 15人の語り で学ぶ HIV陽性者と 地域生活

事例から支援を考える

## 地域におけるHIV陽性者等 支援のためのウェブサイト

<http://www.chiiki-shien.jp/>

このサイトから、HIV陽性者の支援に役立つ、  
さまざまな情報を入手できます。  
以下、今後の予定も含めて、内容を紹介します。

### ●調査報告書

「HIV陽性者の生活と社会参加に関する調査」  
全国1200人以上のHIV陽性者の生活、  
就労の実態に関する調査報告

ほかに相談窓口を対象にした調査、保健所を対象にした調査、  
ソーシャルワーカーを対象にした調査、HIV陽性者を対象にした相談や  
グループ支援に関する調査があります。

### ●研修ツール

2010年度には、HIV陽性者の支援に役立つ冊子やDVD、  
研修プログラムの提供まで、さまざまな取り組みをしていきます。  
必要があれば、ご相談ください。

